

科學的、生活の表現乃至論理的、表現に於きましては、これ亦其の本來の性質からして、多くは抽象的、概念的な名辭をとらへて文題を選ぶのであります。彼の藝術的作品の題目が求心的であり、内向的であつたのに對して、これは外延的であり、包括的であります。「動物」「資本」「數の本質」といつたやうな類は皆これであり、而して茲に一つの面白い現象は、此の種の文題はいつも文中に取扱はれた材料の一切を包んで、一物も洩すまいと努力する所から、概念が上へくと移つて行つて、而かも言葉の長さから言へば短い方へくと進んで行つて、遂に最も言葉の短い、最も上位の概念に落ちつくといふ事であり、

倫理的、生活の表現即ち道德的乃至實用的といつたやうな種類の文章では、其の表現態度が論理的であるか、藝術的であるかによつて、或は概念的、包括的に、或は具體的、象徴的にそれと色調の差を生ずるのであります。通常議論文とか解説文とか批評とかいふ種類のものは主として前者に屬し、科學の民衆化乃

至寓意諷刺といつたやうなものは多く後者の形式をとるのであります。具體例をあげると、「國民の覺悟」「分業に就いて」「果物の貯藏法」等は前者に屬し、「我が輩は蠅である」と題して夏季の衛生を説き、「ゆく春」と題して政治問題を論ずるが如きは後者に屬するのであります。

唯一つ兩者に共通な點は、何等かの形により方法によつて、作者の計畫なり意志なりが、その緒を出してゐる點であります。所謂作意とか顯在文旨とか潜在文旨とか稱するのはそれでありまして。書く方から言へばその作意なり文旨なりの出し方乃至隠し方に文の巧拙があり、隨つて其の文の効果に大小の別を生ずることになるのであります。讀む方から言へば其の作意なり文旨なりを旨く探りあてる——直感するところに、讀書力の鋭さがあるのであります。尙その作意なり文旨なりの出し方に關しては、讀者の程度なり趣味なりを考慮の中に入れて工夫することが、作者としては大事な點になるのであります。

宗教的な文章の題目は、これ亦其の本来の性質からして、或は、思、索、的、内、觀、的、な、或は、哲、學、的、假、想、的、な、或は、信、仰、的、な所謂一括して宗教的なもの選ばれること勿論であります、この意味からいふと、前に述べた三者の更に高級化したものであると言へませう。「捧謝の生活」だの、「叩けよ然らば開かれん」などは此の一例であります。

さて、今度は愈々文題のつけ方に就いて、子供に如何なる指導をなすべきかといふ問題になりますのでありますが、それには大體二つの途があると思ひます。その一は文題をつけさせること、それに就いての指導であります。これは子供が自分の綴つた文章に、自ら適切な題目を選んでつけるやうに導くことも、その一つであります。或は又、他人の書いた文章の題目だけを省いて謄寫版刷にして讀ませ、そのあとで、その文章に相應しい題目をめぐりに考へさせるなども亦確かに其の一法であります。是は單に耳から讀み聞かせた文章に對

しても可能であります。かくて其の結果は、お互に吟味鑑賞して其の適否を批判するのであります。

その二は文章の鑑賞に即して指導するもので、讀本の文章或は他の鑑賞文等を取扱ふ際に、文題も併せて鑑賞吟味し、此の文題は此の文章の何處から生れたものであるかといつたやうな、文題選定の發生的研究にまで進むのであります。その一を直接的な指導とすれば、その二は間接的な指導とも名づくべきもので、此の二方面が揃つて始めて十分に文題選定に就いての指導は其の目的を達し得ると思ひます。

第五 綴り方に於ける推敲の指導

一 綴り方に於ける推敲の意義

推敲といふ言葉の由來——文章と言葉——文章の獨自
性と自處理——文章の普遍性と共同處理

文章なり詩歌なりを創作するに就いて唯一のなやみは、生命と表現との間に罅を発見することにあります。心持と言葉とがピッタリと合しないことであります。

昔、支那は唐代の詩人に賈島といふ男がありました。嘗つて驢馬に跨つて路すがら次の句を得ました。

鳥宿池邊樹。 僧推月下門。

ところが第二句の「僧推」といふ言葉が、何だか心持にそぐはないやうな気がします。そこで次のやうに改めて口ずさんで見ました。

鳥宿池邊樹。 僧敲月下門。

これでやゝ落ちついたやうな気がしましたが、しかし前の「僧推」と言ふ言葉にもやはり未練があります。「僧推」としようか、「僧敲」と改めようか。彼は自ら迷ひました。即ち生命と表現との途上になやみを感じたのであります。そこでとつ、おひつ、彼はやをら手をあげて、空中に「僧敲月下門」の所作を描き

ました。次に「僧敲月下門」の手真似を試みました。かくて幾たびか推してみたり敲いてみたり、夢中になつて馬上に喜劇を演じてゐます。丁度その時向ふから同じく驢馬に跨つて來かゝつたのは、これも當代の詩人韓退之でありました。二人の詩人は狭い路上でバツタリ出逢ひました。ところが一方の詩人賈島は詩作のために夢中になつてゐるものですから、向ふから韓退之がやつて來たことに一向気がつきません。相かはらず手をあげて、推したり敲いたりの手真似をやつてゐます。驚いたのは韓退之でありました。賈島の手真似に狭い道を塞がれて、通ることが出来ません。仕方なく黙つてみてゐると、賈島の驢馬と韓退之の驢馬とが鼻をつき合せてヒヒンと嘶き合ひました。そこではじめて現實の我に歸つた賈島は、相手が當代有数の詩人韓退之であるのに気がつくこと、事情を具して失禮を謝すると共に、辭を低うじて教へを乞ひました。韓退之は一伍一什を聞いて大いに其の心掛を賞し、併せてそれは「僧敲」の方がよからうと申しました。賈島は大いに喜んで、そのまゝ韓退之と馬の轡をならべて歸

途につきました。後に次の名詩をまとめました。

題李疑幽居

閑居少鄰並。草徑入荒園。鳥宿池邊樹。僧敲月下門。

過橋分野色。移石動雲根。暫去還來此。幽期不負言。

「推敲」といふ言葉はそれから生れたといふことでありますが、賈島の此のなやみは、やがて今人のなやみであります。それは敢て詩人に限らず、又大人と小人とにかゝはらず、凡そ文章なり詩歌なり童謡なり俳句なりを創作するものゝ、等しく體驗するところのなやみであります。未だ嘗て此の種のなやみを経ずして創作をなし得たりと誇るものがあるならば、それは破天荒の天才か、然らずんば安價なる文章の遊戯的乃至機械的製造者に外ならないと思ふのであります。

文章は生命の表現なりといふ命題は、文章を作者の生活にまで還元して考へ

た時に言ひ得らるゝ言葉であると思ひますが、私は其の前提として先づ文章は言葉であると思ひます。それは何故でありませうか。順序として先づ生活本然のすがたを見つめてみなければならぬと思ひます。

元來、物あつて我が心に觸るゝのか、我が心が進んで物に觸るゝのか、それらの關係は姑く置いて、兎に角、我が心と物とは絶え間なく相接觸し、相融合し、相燃焼してゐます。我々の精神生活は、かうして深みより深みへ永遠の營みを續けて行くのであります。世間で通常認識とか體驗とか言つてゐるのも、結局は心と物との接觸、融合、燃焼の心境を物語るに過ぎないと思ふのであります。

而して、我が心と物とが相觸るゝ時、相融合する時、相燃焼する時、そこから我々の本當の言葉が生れると思ひます。我々の言葉は、實に心と物が觸れ合ふ時に發するひびきであり、やがてそれは心と物と包全一如のすがたであります。しかも、我々の生命は此のひびきを内聽することによつて躍進し、我々の精神

生活は此のすがたを内観することによつて發展するのであります。そこに言葉本来の意義があり、同時に生活本然のすがたが窺はれると思ふのであります。之を要するに、言葉は生活本然のすがたを象徴したものであり、それはやがて、生命躍進のあるがまゝなるすがたであります。生命、生活、言葉、それはまさに分離すべからざる一元的な實在で、端的に言へば、生命即生活即言葉なのであります。

言葉が音聲に託されて發展する時、そこに談話乃至演説が生れ、言葉が文字に託されて發展する時、そこから文章乃至詩歌が生れます。故に文章は文字による言葉の發展であり、同時に生命躍進のあるがまゝなるすがたであります。文章が生命の表現であるといふ命題に到達する過程に於て、文章が言葉であると申しましたのは、全く此の理に基づぐのであります。

今も述べた通り、言葉は生命躍進のあるがまゝなるすがたを寫したものであ

りますから、そこには、いちにんの生命が有つ唯一独自のひびきがなければなりません。換言すれば、私の言葉は、私の生命と物の生命との交響樂であり、それはやがて私の個性（正しくは特殊性）と物の個性（同上）との合一であるばならぬと思ひます。文章に作者の個性（同上）の尊重される所以は、蓋しこゝにあると思ふのであります。

随つて文章創作の過程に於ける推敲の仕事は、本體として當然作者自身が之をなすべきものであります。何となれば、自らの心持と、自らの言葉との間に生ずる間隙を見出し得るものは、嚴密な意味に於て自己以外にあり得ないからであります。今日の綴り方指導に於ける處理の仕事が、昔頑迷なる教師によつて獨斷的に試みられた所謂添削の惡風から脱化して、蘆田氏の所謂自處理、指導の域にまで進んだことは、子供の爲にもお互ひのためにも甚だ慶すべきことであると思ひます。

しかしながら、又一方から考へてみると、言葉は一つの道であります。眞實の道であります。此の道は、生命表現に際して作者が選んだ唯一の道でありますけれども、しかし作者一人が私すべき道ではありません。それは實に作者のために唯一の道であると共に、讀者のためにも唯一の道であります。私の道であると同時に公の道であるのであります。故に、若し作者の言ふことが單に作者個人に終つてしまつて、他に通じないやうであつたなら、それは遺憾ながら言葉乃至文章としての價値がないのであります。いちにんの悲しみは萬人の悲しみに、いちにんの喜びは萬人の喜びに到らなければ、本當に價値ある文章とは言へないのであります。いちにんのまことが萬人のまことに通じ、いちにんの善が萬人の善に通ずる時、そこに生きた言葉の有難味があり、文章の眞價が發揮されると思ひます。

我々の生命は、其の頭上に唯一獨自なる個性（正しくは特殊性）の光りをかさしながら、脚下には萬人が反抗なき了解を以て相通する正しい道を堅實に踏

まへて行くことが大切であります。文章が一面から見ても作者の個性（同上）の表現であると同時に、他の一面から見れば作者の普遍性の表はれであるといふのは此の理に基づくのであります。

かうした意味から、前に述べた文章創作の過程に於ける推敲の仕事に就いては、作者自身が自ら深く沈潜し内省して、生命と表現との間に生じたひづみを發見し、延いて之を正すことが極めて大切であると思ひますが、尙ほ之に加へて讀者の所感を叩き教示を乞うて、之を他山の石とすることはまた大いに價値のあることであると思ひます。私は今日の綴り方教育界を大觀して、一面、自處理、自指導の功績顯著なるを喜ぶと同時に、他の一面に於て所謂共同の批評、乃至教師の指導のやゝ忽諸にされてゐないかを危惧するものであります。

二 綴り方に於ける推敲の指導

指導事項と指導法——推敲指導の一例

以上の立場に立つて、綴り方に於ける推敲の指導を考へてみると、先づ次のやうな指導事項及指導法が浮んで來ると思ひます。

先づ指導の事項としては、

- 1 題材の掴み方乃至まとめ方
- 2 言葉——語句の選擇排列
- 3 文字その他の符號の用ひ方

といふやうなものがあつて、指導法としては、

- 1 一般的に暗示を與へて推敲させる場合
- 2 個人々々の成績に注意を與へて推敲させる場合
- 3 個人を膝下に呼んで注意を與へる場合
- 4 板書乃至謄寫版刷にして共同で考へさせる場合
- 5 兒童相互に相談させて推敲させる場合、等々

といつたやうなものがあると思ひます。

而して、題材の掴み方の指導については専ら「描寫法」の研究が大切であり題材のまとめ方の指導については「論理」の吟味が必要になつてまゐります又言葉——語句の指導については、文法乃至語法等の約束的知識も相當大切であるし、文字その他の指導については文字力乃至文字に對する感覺その他が相當必要でありませう。

指導の方法に至つては、之は指導すべき事項の如何によつて決定すべきものであると思ひますが、今是等について一二の氣づいた事を申さうならば、先づ第一には、兒童自らが自分の作品について心ゆくまで推敲するやうな態度を作つておくこととあります。即ち文章の各方面の要素について敏感な兒童を作つておくこととあります。第二には原則として推敲は一切兒童自身でやらせ、教師は之に適當な暗示を與へるにとどめておくこととあります。尤も誤字や脱字等について教師が加筆する分は差支へないと思ひますが、從來のやうに教師が勝手に所謂添削を試みて、草稿を眞赤にして返すなどは、よほど考慮すべきこ

とであると思ひます。即ち添削は、教師自身の氣に入るやうに兒童の文章を改作してやるといふ態度よりも、兒童自身に缺點を發見せしめ之を自ら訂正するやうに仕向けるといふ態度が望ましいと思ふのであります。第三には所謂共同處理による指導についてとありますが、之は前にも述べた通り最近あまり見ないやうでありますけれども、これもやりやうによつては相當効果のある方法であることを信じて疑ひません。次に此の種の方法について一つの實例をお目にかけたいと思ひます。

最近、私は自分の擔任してゐる一部四年の子供に「失。敗。した。利。那。の。心。持」といふ指定を與へて綴らせましたが、其の結果此の種の表現に於て誰しもが體驗するであらうと思はれる——事實私も體驗したことのある——幾つかの子供の悩みを發見しました。そこで、次の時間には、早速其の悩みの伏在してゐる個所だけを抜きとつて謄寫版に刷り、子供と共に之を考へてみることにしました。左に其の實際をお目にかけます。

- 1、おばあさんが「十一銭のお酒を買つておいで」とおつしやつたので、僕は十一銭もつたつもりで五銭五厘をもつて酒屋へ行きました。そして「十一銭のお酒をちやうだい」といつて、五銭五厘を出しますと、酒屋のをぢさんがそれを見て「これは五銭五厘ですぜ」といひました。僕はおどろいてよく見ましたら、やつぱり五銭五厘にちがひないのでハツと思ひました。
- 2、おせいよくがらくと玄關の戸をあけて、お父さんがおかへりになりました。私はお客さんかと思つて出ると、それはお父さんでした。
- 3、けいし、水のびんが、するりと手からすべりおちてこはれたので、僕はしまつたと思つた。

先づ1の方から、靜かに黙讀させて、一緒に考へることにしました。1の文章で最もまづいと思はれる點は、十一銭と五銭五厘を取違へて來たことを最初から意識してゐたかのやうな書きぶりです。かう書いたのでは、失敗した刹那の心持——切角捉まへようとした大事な文の生命がどこへかスルリとぬけてい

つてしまつて、あとに残るものは徒らにこた／＼した筋ばかりです。でも、作者が此の表現に一方ならず苦心したことは推察に難くありません。苦心に苦心を重ねて、しかも遺憾ながら失敗に終つたのであります。作者の此の心情には大いに同情しなければならぬと思ひます。同情——といふよりも、私は尊い此の材料を提供してくれたことを子供に感謝したのであります。なぜかといふに、此の子供の此のなやみは、單に此の子供一人のなやみではなくて、實に他の多くの子供に共通ななやみであり、むしろ私自身がいつも逢着するなやみであるからであります。で、私は此の何人もよく逢着するなやみの根柢を吟味して、子供と共に此のなやみから逃れようと考慮したのであります。それに就いて先づ私は子供の二三人に批評させました。共通のなやみでありますから、子供の批評は皆要點にふれてゐました。次いで私は批評するかはりに、作者たる子供に向つて次のやうな問答を試みました。

問「君は始めから五錢五厘と知つてもつて行つたのではなからうと思ひます

が、その五錢五厘であることがわかつたのはいつですか。」

答「それは酒屋のをちさんが五錢五厘ですぜと言つた時、よく見て始めて分つたのです。」

問「君は其の文章をよんで、君のその時の心持がしつくりと現はれてゐると思ひますか。」

答「いゝえ。どうしてもうまく書けなかつたんです。」

問「なるほどナ。いかにもさうでせう。ところでもう一つ尋ねますが、そのお錢はおばあさんから受取て行つたのですか、それとも君が財布の中から勝手に持つて行つたんですか。」

答「箱の中にあつたのを勝手にとつて、手に握つて行つたんです。」

問「うむ。大體わかりましたが……其のお錢はどんなお錢でした？」

答「まん中に穴のあいた白銅貨と、銅貨とでした。そして十錢だと思つたのが五錢で、一錢だと思つたのが五厘だつたんです。」

最後に以上の事實に基づいて、子供と共にどう直したら、作者の此の時の心持がしつくり出て来るかを工夫しました。そして子供はめい／＼ノートの上に書きはじめました。あとでしらべてみると、いろ／＼名案が出ましたが其の中で原作者のがやはりさすがに一番よく出来てゐました。それは次の通りです。

1. おばあさんが「十一銭のお酒を買つておいで」とおつしやつたので、僕は箱の中からお金を出して、左手にしつかとにぎつたまゝ酒屋へ行きまして。そして「十一銭のお酒をちやうだい」といつて、お金をわたしますと、酒屋のをぢさんはそれを手にとるなりすぐ「これは五銭五厘ですぜ」といつたので僕はびつくりしました。よく見るとなるほど五銭五厘です。僕はハッと思つて……………

次は2の分です。これも前のとよく似た缺點をもつてゐます。これは二三人の子供が批評すると、作者が自ら次の通り訂正を申し出ました。
がらく／＼とむせいよく玄關の戸があいたので、お客さんかと思つて出てみる

と、それはお父さんでした。

ところが、一人の小供がいきなり立つて、それではまだいけない所があるやうだと申し出しました。その子の批評によると「がらく」といせよく戸が「いた」ならお父さんか誰か、其の家の人にきまつてゐる——お客さんだつたらもつと静かに戸をあけるだらうといふのであります。私も成る程と思ひました。外の子供も、作者も賛成しました。そして三度び訂正を申し出ました。それは次の通りです。

2、がらくといせよく玄關の戸があいたので、誰かと思つて出て見たら、それはお父さんでした。

これでやゝ其時の心持がしつくりとこたへて来るやうです。次は3の文章ですが、さつきから考へてゐたらしい作者は、批評をしない前に自ら訂正を申し出しました。そして、その訂正は私をびつくりさせたほどよいものでした。

3、あッ、しまつた……と思つた時はもうおそかつた。けい、水のはんは僕

の手からするりとすべつて、がちやんと音を立てながら足もとにこはれた。

僕はむねをどきんとつかれたやうな気がした。

以上はほんの一例にすぎないのでありますが、私は時々かうした取扱を試みることによつて、表現上に於けるなやみを除くやうに工夫することも、お互ひが文章道に精進する一つの有力な手段であると思ふのであります。

歡喜抄

ひるすぎの陽があたる山くぼの山雀 (茶臼山)

たゞ一人なるわが拍手の冴え返り (出雲大社に詣づ)

水筒さがしにゆく谷間よりの鶯 (遠足)

しつとりとぬれて黒牛が草を食み居り (盛岡を過ぐ)

熊笹のしげみに立ち 霰見送りぬ (八雲山中にて)

第六 綴り方に於ける鑑賞及び批評の指導

一 綴り方に於ける鑑賞の指導

綴り方に於ける鑑賞指導の目的——鑑賞の材料——鑑賞の意義と過程——鑑賞の指導——鑑賞より創作への一例

綴り方に於ける鑑賞指導の目的は、之によつて立派な文章の外形的模倣をやらせようといふものではありません。よい文章を鑑賞させることによつて、児童の内面生活に一種の刺戟を與へ、以て、眠れる児童の感受性を呼び覺まし、沈滞硬化した生活から生きくとした自由な觀照の生活に甦らせ、或は淺薄平凡な生活から内觀沈潛の生活へ導入しようといふのであります。同時に、さうした自由清新な觀照の生活、深い沈潛内觀の生活から、其の表現への過程、即ち

生みの苦しきといふ尊い創作の生活過程に一種の暗示を與へ、インスピレーションを投入して、以て文章胎生の道に何等かの發明をするやうに仕向けてやらうといふのであります。かうした立場から鑑賞の指導を見る時、それは綴り方生活の上から見て極めて大事な一面の指導であると思ひます。

鑑賞の指導が兒童の生活に向つて内面的な刺戟を與へることを當面の目標とするならば、綴り方に於ける鑑賞の材料は、當然此の目的に添ふやうなものが選ばなければならぬと思ひます。今之をやゝ具體的に、箇條書きにしてみると、

1. 兒童の内面生活——物の觀方、考へ方、生活反省の仕方等——について何等かの刺戟を與へ發明を促すに足るもの。

2. 兒童の綴文生活——題材の見つけ方、掴み方乃至纏め方、言ひ現はし方、文題のつけ方等——について、何等かのヒントを與へ發明を促すに足るも

の。

といつたやうなことになると思ひますが、尙ほ教育といふ一般的な立場から

3. 下品ならざるもの、

の一項を加へたいと思ひます。而してかうした要件に叶ふものであれば、之を大家の作品の中から選ぶもよからうし、讀本の文章の中から持つて來ても結構だと思ひます。特に兒童の作品の中には適切な材料が多いと思ふのであります。之は大いに利用すべきであると思ひます。或る種の指導を目的とする場合、例へば描寫に於ける特徴の掴み方を指導する目的のためには、尋常四年の子供に一年下の尋常三年の子供の作品を味はせるも結構だし、又一年二年上の尋常五年六年の子供の作品を持つて來るも結構でありまして、學年の別なく適材を適所に利用して一向差支ないと思ふのであります。

さて、如述のやうな目的のもとに、如述のやうな材料を選んだとして、之を

如何に指導したならばよからうか、次に起る問題はそれでありませう。而して此の問題を解決するためには其の前提として少くとも次にあげる二つの問題について一通り理解しておくことが必要であります。

其の第一は鑑賞の意義に關する考察であります。此の問題については近來心理學者や哲學者乃至教育者の間に於て、大分意見が闘はされて居るやうであります。結局、文章を對象として營まるゝ一種の獨創的な精神生活であるといふ點に於ては異議がないやうであります。何を以て一種の獨創的な生活となすか、それは鑑賞の材料は同一でも之を讀み味ふ人の經驗の廣さ體驗の深さによつて、それ〴〵に想像の場面を異にし、感鳴の度を異にするが故であり、且つ又、其の想像や其の感鳴やは、その以前に於ける自己の經驗體驗の單なる再現ではなくして、實に過去の經驗體驗が、其の文章に刺戟されたことによつて營まるゝ一種の新らしい世界であるからであります。鑑賞の中に創作ありとか、

鑑賞も一の創作だとか言ふのは、全く此の理に基づくのであります。

而して、かうした鑑賞生活の内面的な作用については、いろ／＼と分析的な研究を試みてゐる向きもあるやうであります。よく／＼考へてみるとこれは實に複雑な、分析を許さざる精神要素の営みでありまして、場面の想像とか、作者の想定とか、氣分の享樂とか、興奮とか、生活の反省とか言つたやうな要素は、次第不同に或はかはる／＼に消長轉化して、實に文字通り變幻出沒の世界を内現するのであります。たゞしかし、此の生活を営むことによつて、そのたび毎に最後には必ず一歩進んだ自己を見出だすこと、これだけは見逃してならない事實であると思ひます。

其の第二は鑑賞の心的過程に關する考察であります。こゝにも亦、學者や實際家が種々の説を立てゝ居る様であります。私は茲に多くの人々が氣づかないでゐるところの、根本的な一大問題がひそんで居ることを發見いたします。

それは所謂「鑑賞の心理過程」といふ言葉の實體に對する見解であります。元來、鑑賞に於ける私たちの精神生活は、前にも述べた通り極めて複雑な心の営みでありまして、其の過程は決して一定の型や法則に隨ふものでありませぬ。たとへば、從來多くの人々によつて唱へられ、且つ又多くの同意者を得て居ると見られるところの、

1、理解——乃至知解

2、鑑賞——乃至翫賞

3、批評

といふ過程の如きも、これが直ちに文章鑑賞の心理過程を如實に物語るものと思つたら、それはとんでもない間違ひであります。これは單に讀文に於ける精神作用を理論的に分析し、其の要素を論理的な思考に基づいて排列したに過ぎないのであります。率直に言へば「鑑賞の心理過程」ではなく、「鑑賞心理の論理的考察に基づく一般過程」であります。更に端的に言へば、「心理過程」に

あらずして、論理過程」であります。

私たちの讀文生活に於ける鑑賞の作用は、決して右の論理過程を時間的に實行出来るものではありません。文章の文字語句其の他を、先づ知的に悉く了解して、然る後に鑑賞がはじまると思つたら、それは甚だしき誤解であります。理解と鑑賞とは相互ひに即して居るべき筈のもので、理解の始まる時、之に即して直ちに鑑賞が始まるのであります。もつと具體的に言へば、一段落を讀んで臆ろげな理解を得る時、そこには直ちに一段落の淡い味ひが伴ひ、一篇を讀了すれば直ちにそこに一篇の味ひが伴ふのであります。かくて、それが幾回も繰り返され、而かも極めて複雑に繰り返さるゝことによつて、漸次に淺き理解より深き理解へ、淺き鑑賞より深き鑑賞へと、渾然たる進行をつゞけて行くのであります。

彼の讀み方の學習指導に於て、昔はよく第一時理解、第二時鑑賞など、右の所謂「鑑賞の一般過程」を輪切りにして、之を時間にあてはめた取扱ひを試

みたものでありますが、これは矢張り「論理過程」を「心理過程」と誤信したところから生れた一種の悲劇であつたと思ひます。

かういへば、文章鑑賞の一般過程を考へることは、何等の利益もないことゝやうに思へるかも知れませんが、必ずしもさうではないのであります、若し私たちの讀文生活が最も單一に運ばれた場合を豫想し假定すれば、それは直ちに實際と一致するのでありますから、之を以て鑑賞指導上に何等かの手がかりを求めるとはあなたがち無謀なことではありませぬ。即ち鑑賞の一般過程は、之を輪切りにして時間にあてはめる等の愚をなさず、どの時間、どの部分について、複雑に之が繰りかへさるゝことを思つて、一般と特殊、全體と部分との關係を十分考慮の中に入れたら、指導上便宜を得ることが決して少くないと思ふのであります。

以上の見解に基づいて、私は次に私の考へてゐる此の種の過程を述べてみた

いと思ひます。

(文章鑑賞の心的過程——實は論理的考察による一般過程)

- 1、先づ落ちついた心持で文章に向ふ——
- 2、ふれてゆく文字語句の一つ一つが心の奥にひびく——
- 3、そのまに／＼、心の奥に潜在してゐる過去の經驗の一つ一つに聯想の火を點する——
- 4、そして其の經驗の一つ一つが明るく燃えて甦る——
- 5、それが次へ／＼と燃え廣がつて、そこに一種の全く新しい想像の世界が展開される——
- 6、讀者はその想像の燃焼世界に遊んで、思ふ存分其の輝きにひたり、其の喜びに泣きぬる——……或は作者の想定を行ふ……
- 7、——そしてその文章を読み終つた後、しばらく文章から目を離して冥想にふけり、或は幻想の影を追ひ、或は自己の生活を反省する——

8、最後にさまざまの感想が残り、そこに一歩進んだ自己の姿を見出だす。

——(以上の各項が複雑に繰返さるゝのであります)——

右は主として藝術的な作品を味はふ場合の心境を述べたのでありますが、論理的な文章を読みふ場合には、(之を鑑賞といふか否かは別問題であります)(5)(6)(7)の精神作用が主知的な思惟の作用に代り、内容が自ら異なることなるのであります。

さて、今度はいよいよ鑑賞の指導であります。それは要するに今第一及び第二に於て、述べたところの精神作用を子供めいゝに營ましめることによつて、子供各自にその内面生活乃至表現の手法に就いて何等か得るところあらしめ、教師は之に對して、或る種の暗示を與へて其の到らざるを啓發してやればそれでよいのであります。

例へば

お父様、お母様、弟、僕、みんなの嬉しさうな顔が、お盆の上の大きな西瓜を圍んでゐる、口の中へひとりにつばが出て来る、お母様の手に長い庖丁が動く、ざくり、眞赤な西瓜である。一切とるといきなりかぢりついた。お父様が「競争々々」とおつしやつたのでみんな大笑ひ。弟は口のみはりから手くびのあたりまで、眞赤なしづくをたらしながら、ものも言はずに食べてゐる。お母様が「昭さんはきらひでせう」とおつしやると「うん」と鼻聲で言つて、首を横にふりながら相變らすむしやく／＼食べてゐる。忽ち無くなつてしまつた。「もう無いの」と弟が物足らない様な顔をしてゐる。僕もまだ食ひ足らない。お盆の上は皮や種子で一ぱいになつた。

「實にうまかつた」とお父様がおつしやると「ほんとに元氣がつく様な氣がしますね」とお母様もおつしやつた。(尋五男)

此の文を尋常五年生に鑑賞させるとします。この文章は事實尋常五年の子供が綴つたのでありますから、五年の子供ならわけなく其の内面には入ることが

出来ると思ひます。で靜かに黙讀させた後、子供めい／＼に感想を語らせ、いと思ふところを擧げさせてみる方が面白からうと思ひます。そして若し其の鑑賞に到らぬ所があると思ふ時、次のやうな暗示的な問答を適宜に試みて、彼等の鑑賞眼をそれ／＼啓發してやればよいのであります。

□ どんな場面が目には浮びますか。——皆さんにもこんな経験がありますか。

□ 幾人して西瓜をたべたんですか。

□ この文を書いたのは？

□ 自分のことについてどれほど書いてゐますか——そのうちで一番うまく書いてゐると思ふ所は？

□ 四人のうちで一番よく書いてゐるのは誰れですか。——それがどこに？

□ 作者のお父さんはどんな人だと思ひますか——それがどの言葉に？——種子あかしをさせう。此のお父さんは海軍の將校さんです。

□ お母さんは——いかにもお母さんらしいところが何處に？

□ 此の文章を全體から眺めてどこの書きぶりが一番い／＼と思ひますか

□ その外にい／＼と思ふ所は？

□ ——「みんなの嬉しさうな顔が、お盆の上の大きな西瓜を圍んでゐる」

——こゝをどう思ひますか——なぜうまいのですか。

□ 何といふ題にさせうね。

今一つ尋常二年の實例をあげておきませう。これは鑑賞より創作への實際例であります。

時は丁度七月のはじめ、尋常二年生に自由作をやらせましたう、子供の作品の中に、偶然次のやうな文章が見つかりました。

私のくつつ

私のくつつは、一年の時から、學校へゆくにも、よそへゆくにも、よくおももをして行きました。あんまりはたらき過ぎたので、おなかの皮がやぶれ

てだるさうになりました。もう此の上はたらかせるのは、かはいさうでしたから、びやういんにふいんさせて、おなかのやぶれをなほして貰ひました。そして、すつかりもとのやうにげんきになりました。又、もう一どはたらくといひますから、こんどは私より小さな、かはいとおじやうさんのおけらいにしてやりました。たいそうかはいがつて下さいますから、きつと私の時のやうによくはたらくでせう。(二年女)

何と面白い見方ではありませんか。單なる筆さきのあやではありません。技巧によるごまかしでもありません。全く浪漫的な子供の生活、純な作者の生活から生れたのです。私にとつて此の作は實に今までに思ひ設けなかつた貴重な收穫でありました。

で、私は次の時間に、早速謄寫版刷にして、みんなの子供と一緒に之を鑑賞することにいたしました。みんなの子供も之を見るとおどろきました。そしてよろこびました。

「あ、ん、ま、り、は、た、ら、き、す、ぎ、た、の、で、お、な、か、の、皮、が、や、ぶ、れ、て、た、る、さ、う、に、な、り、ま、し、た、」

といふところが非常に面白いとほめる子供もありました。

「もう此の上はたらかせるのは、かはいさうでしたから、びやういんに、ふいんさせて、おなかのやぶれをなほしてもらひました。」

といふところはうまいなアと感嘆の聲を放つ子供もありました。「びやういんはどこですか。」といふ一人の子供の間に、「私の、近所の、靴屋、さん、で、す。」といふ作者の答へは、更にみんなを喜ばせました。「私より、小さな、かはい、とおじやうさん、といふのは誰のことですか。」と問うた子供には、「それは、妹、さん、で、せう」と他の子供が代つて答へると、作者は黙つてうなづきました。「こんなに面白いのは、讀本の中にも書いてないね。」と誰やらが感心したやうに隣の子に囁くと、「ほんとに面白いね」とみんなは心から推賞するのでありました。

次の綴り方には之にヒントを得て、かうした観方をしたものが澤山出て來ま

した。次にその一二をあげて見ませう。

うちのとけい

私のうちのとけいは、もう大ぶん年をとつてゐるので、このごろ、よくおねむりをするやうになりました。このあひだも、三時をすこしすぎると、いつのまにやらおねむりをしてゐました。こうばのフートルが五時をしらせたので、いそいでうちのとけいを見ると、三時十五分のところでやすんでおきました。それでお母さんにいふと、お母さんは「けさねちをかけておいたのに」といつておたちになりました。そしてとけいをはしらはづして、二三べんおふりになると、とけいは目がさめたやうにうごき出ししました。ぼんごはんの時、お母さんがお父さんに「けふはまたとけいがとまりましたよ」とおつしやつたら、お父さんは「ちかいうちになほしにやろう」とおつしやいました。

きのふのあさ、きがついてみると、いつのまにか、とけいのかほがきれ

になつてゐました。ふしぎにおもつて、お母さんにおきゝすると、「あれはとけいやさんにしゆうぜんにやつて、ゆうべかへつて来たばかりです。」とおつしやいました。これからも、とけいのおねむりがなくなるでせう。

(二年女)

ぼくのかはん

ぼくのかはんは、ぼくが學校へいくとき、どうぐをふところへ入れて、まいにちおともをします。學校でおけいのあるあひだは、こしかけの下のたなの中で、おとなしくまつてゐます。ぼくがかへるときには、また、どうぐをふところに入れて、おともをします。

うちへかへると、どうぐをだして、つくゑのわきのはしらにかけてやすませます。よる、ぼくがべんきやうをしてゐると、かはんは、はしらの上からぼくをみてゐます。

あくるあさ、よがあけると、ぼくはかほをあらつてから、ぼんやどうぐを

そろへて、またかばんのふところへ入れさせてもらひます。すると、かばんはふところをふくらませて、つくゑの上にやすんで、ぼくの學校へゆくのをまつてゐます。

ゑんそくの日には、どうぐのかはりに、おべんたうや、おすしのをりを入れて、のはらへおともをさせます。

ぼくのかばんは、ぼくのために、大そうちゆうぎをつくします（二年男）

二 綴り方に於ける批評の指導

何のための批評ぞ——他人の悩みを自らの悩みとして
——批評の根柢——結び

綴り方に於ける批評は、何のためにやらせるのであるか。先づそれを考へてみなければなりません。人の文章の缺點を指摘させて痛快の感じを味はせるためであるかと言つたら、誰しもそれに對して賛成だといふ人はないでありませ

う。しかしながら實際の有様を見ると、とかく批評といへば他人の文章作品にケチをつける——しかも幾分否多分に嘲笑の意味を含んだ言葉や態度が現はれがちになるのは何故でありませうか。そこには考ふべき多くの問題がひそんで居ると思ふのであります。

先づ私が思ふのに、批評は他人のためよりも自分のためによい修養の機會ではありませんまいか。他人に缺點を教へてやると言つたやうな態度をやめて、他人の長所を發見しては其の前に躓いて啓示を受け、他人の表現上の悩みを見出だしては之を自らの悩みとして生かすべき工夫をこらし、他人の缺點は之を自分の缺點として正してゆく——さうした敬虔な、而して謙虚な心持に立脚する時、その批評は受ける者もする者も、ともに親しい心からのまどろみであり、その教室は温かに清らかな修養の壇場となるであらうと思ふのであります。

次にもう一つ考へておきたいことは、鑑賞と批評との連關問題であります。私が思ふのに最も正しい、且つ深刻な批評はどこから生れるかと言つたらば、それは第一にその文章に對する正しい理會乃至深い鑑賞、第二には更に其の根柢となる自己の綴り方の深い體驗、それを描いて他に無いものではありますまいか。かうした點から考へると、文の批評といふ仕事にかゝるについては、何を描いても先づ其の文の理會乃至鑑賞といふことが極めて大切なことになつてまゐります。正しき理會、深い鑑賞を経ずして他人の文章に批評を試みることは、冒瀆越權も甚だしいもので、さうした批評は他人のためにも、自己のためにも、有害にして無益なる仕事であると思ふのであります。

今日の所謂「批評」に、他人のアラさがしの多いのは、さうした點にも手落ちがあるのではありますまいか。

之を要するに、他人の文章に對しては、先づ謙虚な素直な心持で之が理會と

鑑賞とを試み、他人の問題は之を自分の問題として教へを乞ふ心持で批評する、その時、そこに本當の批評が生れ、價值ある修養が遂げられるものではあるまいかと思ひます。批評の指導は、そこに主眼をおきたいものだと思ひます。尙ほ、批評の材料とか、言葉とか、さうした問題は澤山數へられるでありますが、それは殆んど説明するまでもない事と思ひますから、これで此の項を結びたいと思ひます。

第七 綴り方に於ける文話

一 文話と綴り方生活

文話の使命と價值——文話と綴り方生活

綴り方生活に於て、兒童が何等かの悩みを有つ時、その悩みを救ふために、又、兒童が何物かを求めんと欲する時、その希望をみたすために、文話は極め

て大切な使命を有つものであると思ひます。

私は時々、雑誌又は著述等の中で、名ある文學作家乃至詩人といったやうな人たちの創作上の苦心談を見出だすことがあります。さうした時私はいつも息づまるほどの心持で之をむさぼり望むのであります。おかげで、それまで自分が惱みつけてゐた其の種の問題が釋然としてとけゆく心持は、何を以て之を譬へることが出来ませう。さうして、それがやがては我が文章の上に、或は作詩の上に、我が力となつてゆくことを思ふ時、これ亦まさにあらゆる形容を超越した喜びであります。さうした喜びを、私たちの親愛する児童の上にも分け與へることが出来たならば、それは児童たちにとつて如何ばかり幸福なことでありませう。

私は又、時々先達の著述の中に、或る文藝作家の作品と共に、その作家の生活とか逸話とかの紹介を試みられたものを見出だすことがあります。そんな時にも亦、私は言ひ知れぬ心のときめきを覺えて、それ以來私は其の作家が馬鹿

に好きになつたといふ幾多の例を有つて居ります。實際、文章でも詩歌でも、嚴密に言へば其の作者の生活なり人格なりを背景にして見る時、そこに始めて本當の親しみを感じ、本當の味が分るやうな氣が致します。かうした體驗は、矢張り児童にも之を分ちたく思ひます。

かうした點に於て、私は文話の意義と價值とを認めたいと思ふのであります。

次に文話の交渉する限界を考へてみるに、それは頗る廣汎で、殆んど綴り方の全面に亘ると言つてもよろしいと思ひます。即ち、物の觀方、考へ方、感じ方、内省の仕方、題材の見つけ方、題材の掘り方乃至は纏め方、表現の仕方、文題のつけ方、推敲の仕方、鑑賞の仕方、その他あらゆる綴り方生活の各方面に亘つて、文話を試みるべき問題は多く、文話を試むべき機會は少くありません。適當な材料乃至問題を得る毎に、或は適當な機會を得る毎に、逃さず之を活用することは、綴り方指導にとつて甚だ意義あることであると思ふのであり

ます。

二 文話の實際

文話の手段——文例に即して行ふ文話と其の實例——
單獨に行ふ文話と其の實例

文話を行ふ手段には、いろ／＼の行き方があると思ひますが、その主なる場合を考へてみると、大體二つの場合があると思ひます。

其の一つは鑑賞材料乃至文例に即して行ふもので、よい文とわるい文との見わけ方、よい文の味ひ方——物の觀方考へ方の要領といつたやうなものを會得させるには、これが一番だと思ひます。尤もこれには、適宜兒童との問答を挿入して文話を進めるのが普通であります。次に其の一例をあげておきたいと思ひます。

□

〔話題〕……文のタネと其の見方

〔學年〕……尋常二年

〔鑑賞材料〕……兒童文（尋二女兒作）（豫め謄寫版刷にして配布して）

私のくつ

私のくつは、一年の時から、學校へゆくにも、よそへゆくにも、よくおともをしていきました。あんまりはたらき過ぎたので、おなかのかはがやぶれて、だるさうになりました。もう此の上はたらかせるのはかはいさうでしたから、びやういんににふいんさせて、おなかのやぶれをなほしてもらひました。そして、すつかりもとのやうにげんきになりました。又、もう一度はたらくと言ひますから、こんどは私より小さな、かはい、おじやうさんのけらいにしてやりました。たいさうかはいがつて下さいますから、きつと私の時のやうに、よくはたらくでせう。

〔文話の實際〕

先づ話題を板書して、

教「皆さん、文のタネつて何のことだか分りますか。」

兒「綴り方で書くことがタネでせう。」

同「文のもとでせう。」

教「さうです。書くことといつてもよろしい。文のもとと言つてもよろしい、文のタネといつても同じことです。バンダネからおいしいパンが出来るやうに、文のタネから綴り方が生れるのです。今日はこれから、その文のタネについてお話をいたしませう。……そこで先づ、みなさんに見て貰ひたいものがあります。そこにあるのは此の組の〇〇さんが此の間つよつた文章です。しづかに読んでみて下さい。」

(かう言ひながら、謄写版刷を読ませます)

教師一回よんできかせた後、

教「さあ皆さん、どうですか。」

兒「面白いです。」

兒「大變面白いです。」

教「なるほど面白いですね。皆さんは一體どこが面白いですか。」

兒「あんまり働き過ぎたので、おなかのかはがやぶれて、だるさうになりま
した……といふところが面白いです。」

兒「さうです、さうです。」

教「お、なるほど、こゝは大變面白い観方ですね。二重丸をつけるところ
ですね。これは靴がどうなつた所でせう。」

兒「一年の時からはきづめにしてゐたので破れたんです。」

教「なるほど、さうですね。あんまり働き過ぎたので、おなかの皮が破れて
……面白い言ひ方ですね。……破れた場所が分りますか。」

兒「靴の横ばらの足ゆびのあたる所でせう。」

教「なるほどさうでせうね。……だるさうになつたといふのは？」

兒「やぶれてあぶく、になつたんでせう。」

兒「アハ、、、」

教「なるほど、そいつは面白い。それをだるさうにとはうまく言ひましたね、

……次にいゝと思ふところは……？」

兒「もう此の上働かせるのはかはいさうでしたから、びやういんに、ふいん
させて、おなかのやぶれをなほしてもらひました。……こゝが面白いで
す。」

教「なるほどこゝも大變面白いとすね。靴の入院はよく見立てましたね。所
で此の病院は何といふ病院でせう。」

兒「靴の修繕屋です。」

教「さうですね。では皆さんは、その病院の院長さんが、おなかをどうして
なほしたか、想像ができますか。」

兒「手術したんです。」

兒「やぶれたところを鉄で切つて、そこへ別な皮をあてがつて、ぬひつけて
から靴ずみをつけてみがいただらうと思ひます。」

教「さう、なか／＼よく想像しましたね。……その次にいゝところは……？」

兒「又もう一ど働くといひますから、今度は私より小さな、かはい、おじや
うさんのおけらいにしてやりました。……といふところですよ。」

教「なるほど、こゝもいゝですね、私より小さなおじやうさんといふのは、
誰のことでせう。」

兒「それは〇〇さんの妹さんのことでせう。」

教「さう／＼。妹さんですね。……どうですか、皆さんもこんな文章が書け
さうですか。」

兒「書けます。書けます。」

教「そんなら、此の文章はどんなタネから生れたんですか。」
兒「自分の靴です。」

兒「自分の靴がやぶれたから、それを靴屋へやつて直してもらつて、それを今度は妹にやつたことを書いたんです。」

兒「さうです。」

教「なるほど、さうですね。では皆さんもこんなタネをもつておますか。」

兒「ハイ、もつておます。」

教「たとへば？」

兒「私のかばん。」「私のぼうし。」「私の筆入れ。」等々。

教「なるほど、タネはみんないろ／＼ともつておますね。それなら、皆さん

は今までこんな文章を書いたことがありますか？」

兒「いゝえ、私の靴といふ題で書いたことはあつたが、こんな風に面白く書いたことはありません。」

教「では、此の文章はどうしてそんなに面白いのです。どんな書きぶりだからうまいのですか。」

兒「靴をおともだちのやうに書いてゐるのが面白いです。」

兒「まるで生きてゐる人間のやうに書いておます。」

教「なるほど、よいところへ気がついた。さうですね、此の文のうまいところはそこですね、此の文章を若しこんな風に書いたらどうでせう……私の靴は一年の時に買つて貰つたのです。いつもはきつゞけておたので、大ぶん古くなつて、皮が破れました。それで此の間靴屋へ直しにやりました。さうしたらりつばに直つて來ましたから、それを妹にやりました。……といふ風にしたら？」

兒「それでは少しも面白くないです。」

教「さう。そんなに書くと、折角のタネが臺なしですね。……すべて、同じやうなタネでも、見方、書き方によつては、非常に面白くもなるし、又まづくもなるものです。つまり、タネを生かすも殺すも、書く人の心一つです。此の文章など、こんなタネは誰でも持つて居る、けれどもこれ

だけのタネをこれだけに生かして書いた人は今まで一人もなかつたんですね……なぜ無かつたんでせう……？……気がつかなんだ……それもありません……しかし、もつと其のもとがあるのです……それは文をつくる人の心掛です。此の文は、○○さんであればこそ、本當に自然に書くてしまつたんです。さうです、書かうと思つて書いたんぢやない、文がひとりでにさうなつてしまつたんです。自分のものを大事にする、生き物のやうにして可愛がる——そこから此の文章が生れたんです。すべて、世の中のものは、木でも石でも、たと當りまへに見ると、そのままに木は木、石ころは石ころです。帽子は帽子、靴は靴、別に珍らしいこともなければ、面白いこともない。だから平氣で蹴ちらしたり、ふみころがしたりします。けれども、一旦これを生き物だ、お友達だと思ふと、なんだか可愛くなつて、大事にしたくなります。時にはものを言ひかけてみたい心持にもなります。お人形などは全くさうでせう。さうし

た温い心持、親しい心持、そこから此の文章は生れたのです。して見ると、文のタネを生かして書くといふ事がどんなに大事だか、又どうすればタネが生きるか、よく分りましたね。全く文章の上手下手はそこで分れるのです。もう一度、しつくりと此の文章をよんでみて下さい。

其の二は、單獨に文話を行ふ場合の一例。

〔話題〕……心と言葉

〔學年〕……尋常六年

〔文話の實際〕

松尾芭蕉といへば日本に俳句がはじまつて此の方、第一人と言はれるほどの名人でありました。そのお弟子の一人が、或る夏のこと一句をよんで師匠の前に持つて來て見せました。それには、

米洗ふ前に三つ四つ螢かな (板書)

芭蕉はだまつて其の句を見ておましたが、やがてお弟子に向つて、

「惜しいことに此の螢は死んでゐる。」

と言ひました。お弟子はびつくりして、其の句をとり下げて次の間にさがりながら考へました。

「どうしたんたらう。此の句は昨夜の経験をそつくり書いたのだから……惜しいことに此の螢は死んでゐるとおつしやつた……ハテナ？」

かう思ひながら、お弟子の頭には、此の句の生れたもとである昨夜の出来事はつきりと頭に浮んで來ました。

……自分の家の脊戸——小川の流れ——そこで米をといだ自分——その前に三つ四つ飛んでゐた螢——それで——米洗ふ前に三つ四つ螢かな——何で螢が死んでゐるものか、やつぱり此の通りだ、米を洗ふ前に三つ四つ螢が飛んでゐたんだ、それなのに、先生は螢が死んでゐるとおつしやつた、分らん、ど

うしても分らない。——もう一ぺん見て頂かう……

かう思つて、お弟子は又師匠の前に戻ると、恐る／＼口をひらきました。

「先生、どうも私には先生のおつしやる意味がよくわかりませんが……」

芭蕉は笑つて

「たゞ一字だ、假名が一字だよ、其の一字を取り換へさへすれば、螢は立派に生きる。」

お弟子はますます驚いて、再び次の間へ引きさがりました。そして一心に考へ始めました。

……「米洗ふ前に三つ四つ螢かな——米洗ふ前に三つ四つ螢かな——それで螢が死んでゐる——たゞ一字だ、假名が一字だ……一字……假名一字……その一字を取り換へれば螢は立派に生きる……？……はてナ？……？……米洗ふ前に三つ四つ螢かな——米洗ふ……前に……あッ！分つた！これだ！これだ！」

お弟子は今日の前に黄金の壺でも掘りあてたやうに、かう言つて嬉しさうな叫びをあげるのです。そして手早く假名一字を書きかへると、いそぐとそれを師匠の前へ持つて行きました。

皆さん、お弟子は何を見つけたのでせう、皆さんにその一字が分りますか？
やがて、芭蕉はそれを一目見ると、

「うむ、よし、それで天晴れ名吟になつた。」
といつてほめました。そして、

「すべて其の心掛が第一だ。或る心持を立派に言ひ現はす言葉は、たゞ一つしかないのだから、たゞ一字でも粗末に考へてはならぬ。」

とつけ加へて諭しました。お弟子は今更ながら師匠の鋭い眼光と、周到な用意とに深い感激を覚え、且つ有難さにむせびながら、自分の句をだきしめるやうにして、次の間にさがりました。それには次のやうに書き直してありました。
米洗ふ前を三つ四つ瑩かな

第八 綴り方に於ける描寫の指導

一 描寫の意義及び諸相

描寫の意義及び特質——描寫と擬人——自己描寫——
その他の種々相

描寫といふ言葉を其の語源にまで溯つて、之を發生的に考へてみると、その間には幾多の迂餘曲折がありました。近代文學に於ける自然主義より新浪漫主義への推移を物語る繪巻物がさながらに展開されるわけでありますが、それに就いては先きに拙著「生命の綴方教授」に於て「描寫論」の題下に詳述しておきましたから、茲には之を重ねて説くことを避け、端的に現代に於ける描寫の意義を闡明してみたいと思ふのであります。

さて、現代に於ける描寫といふ言葉は、之を換言すれば藝術的表現の手法であり藝術創作の本道であります。現代に於ける文學上の一般用語としての描寫

は、實に斯くの如く廣汎な意味に於て用ひられてゐるのであります。かうした意味から、描寫の特質ともいふべきものを考へてみると、それは第一に具體的表現といふことであります。何となれば、すべて、藝術の生命は具體に即して表現されてゐるところに藝術本來の特色があるからであります。未だ如何なる世、如何なる時代にも、具體を離れた藝術はなく、またあり得ないのであります。此の意味に於て、藝術は實に生命の具體化であり、描寫は實に生命具體化の道であるといふ事が出来ようと思ひます。

しかしながら、かう言へば、具體のありのまゝを寫眞的に模寫したり機械的に模倣したり、或ひは又自然物の具體即ち素材をそのまゝ羅列したりすることが描寫であるか、又さうしたものが藝術であるかといふ反問を提出されるかも知れません。けれども、かやうな方法は決して描寫ではなく、又かやうなものは決して藝術とは申されないのであります。彼の自然主義作家の誤解と失敗はまさにそこにあつたのであります。

然らば本當の描寫とは如何なるものであるかと言ふに、それはあまたある具體の中から、特に作者の個性にびたりと合致し主觀にびんとこたへたものを選び出すことであり、本當の藝術は、かくして選ばれて、そこに産みなされた、あるがまゝなる具體そのものに外ならないのであります。言はゞ作者の個性乃至主觀によつて選ばれた特殊の具體その物が藝術であります。茲に於てか、私は描寫の特質を一步進めて、描寫は具體を特殊化することであるといふ第二の命題に到達せしめたいと思ひます。

今之を實際の例について考へてみると致しませう。例へば次の俳句を御覽下さい。

五月雨をあつめて早い最上川

芭蕉

これは芭蕉の奥の細道の中に出てゐる句で、「仙人堂岸に立つ、水漲りて舟あやふし」といふ前置きがついて居ります。頃は元祿二年皐月の頃、芭蕉は一笠一枚を友として奥羽のあたりを旅から旅へと渡りあるいておりました。折りから

ふりしきる五月雨に、最上川は今も昔もかはらぬ洪水に名うての川、濁水が川一ばいに漲つて流れは矢のやうな速さです。そこへこのくくやつて来たのが旅人芭蕉、まづその猛烈な水勢に氣をのまれたのであり、勿論、その時に芭蕉の目にふれた物には、その外になほ色々あつたに違ひありません。岸邊の柳、土手下の家、渡し場に立ち並ぶ人々、男、女、しゃべる、のゝしる、さわぐ村人、舟人、それは實に目まぐるしい程の騒々しさ、物々しさ、複雑さであつたに違ひないと思ひます。それを若し自然主義的に片つ端しから寫生して行くとしたら、とても千言萬語でも尙ほ且つ不足を感じたであらう。ところが芭蕉はそれ等の一つくを寫眞的に描くやうな安つばい詩人ではありませんでした。彼の目は、彼の心はこの騒々しい物々しい場面の中に於て、たゞ一寸ちに水の流りに引きつけられました。そして彼はその水の流りに未だ嘗て體驗しなかつた自然の勢を直感しました。彼の血はこれと共に躍り、彼の心はこれと共に相響くのを覺えました。後刻、彼は此の時の心境をしづかに内觀して、

おもむろに「五月雨をあつめて早し最上川」と詠んだのであります。今之を私の言葉で申しますならば、彼芭蕉は實にあまたある具體の中から、特に自分の心を強く刺戟した若干の具體のみを選んで、あるがまゝに之を描き、他は一切之を省略して讀者の自由な想像に任せようと試みたのであります。かくてこそあの様に堂々とした、太い直線的な力を有つところの名吟が生れたのであると思ひます。茲に於てか、私は前に述べた「描寫は具體の特殊化」といふ命題から更に一步を進めて、「描寫の極致は具體の單純化に於てはじめて之を見る」といふ第三の命題に到達しても、敢て差支へなからうと思ふのであります。今述べたのは、藝術に於ける自然描寫の一例であります。今度は方面をかへて、人間の内面生活に於ける複雑な精神現象を對象として、之をあるがまゝに描き出さうと試みる場合を考へてみます。前の場合には描かうと欲する具象が——生命を宿す素材が目に見え耳に聞えて自然の間に存在してゐたのであります。今度の場合はそれが目に見えず耳に聞えず手に把握することを許さぬ

ものであるだけ、それだけ之を描出するには多くの困難が伴ふのであります。へたにしくじると、くだらぬ概念の遊戯に陥つて具象を逸し、随つて掴まうとする大事な生命がすりと逃げてしまふやうな事にもなるのであります、そこで藝術家は茲に比喩又は象徴といふ手段を用ひて、この玄妙不可思議にして且つ複雑極まる精神現象を掴まへるのであります。それは複雑な精神現象をなるべく單純化し、且つ之を他の形ある、色ある或は響ある具體——即ち自然界の事物に譬へて以て之を現はさうとする方法でありまして、修辭學乃至描寫法といつたやうな固苦しい學問上の言葉では、比喩法、明喩法、隱喩法、提喩法、活喩法——又は象徴描寫などと呼ばれてゐるやうであります。今讀本の教材の中から、さうした試みの例を二三拾ひ上げて見ると、

- はらわたがちぎれるやうに思ひました。(國讀、卷五、第二十二、郵便函)
- これが五日もつくと、ひぼした。(國讀、卷六、第五海)
- 此の胸は張りさくるばかりにて候。(國讀、卷九、第二十四、水兵の母)

□ 怒と失望と後悔に身も魂もくだけ果てた王。(國讀、卷十二、第十四課、リヤ王物語)

□ コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。(同上)

□ その刹那、彼は迷の雲がかりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。(國讀、卷十二、第拾九課、釋迦)

□ ……慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。(同上)

□ 國民が熱血をしぼつて叫んだ萬歳の聲。(高讀、卷一、第十六課、征衣上途)

といつたやうな類は何れもこれに屬すると思ひます。

又、考へ方によつては我々の内面生活は、其の複雑なる變化を繼續する點に於て之を宇宙——自然界又は人事界の縮圖と見ることが出来るところから、此の理を逆に應用して、自然界又は人事界の客觀的事象を描くことによつて、之を心の鏡として自分の心持をそこに托するといふ方法も生れて來るのであります。例へば國語讀本卷四に出てゐる「しひの木とかしのみ」の如きは、ブルジ

ヲアに對するプロレタリアの反抗——發奮といつたやうな心持の具體化である
 と言へませうし、又卷十二に出てゐる「青の洞門」の如きは一篇を通じて二元
 の葛藤に苦しむ人間の内面生活を、あるがまゝに映した鏡であると考へること
 が出来ると思ふのであります。
 之を要するに、藝術はあるがまゝなる具體の單純化であり、或はあるがまゝ
 なる心持の具體化であります。而してそれは同時に、その背後に省略された幾
 多の具象乃至心持がひそんでゐることを見逃してはならぬと思ひます。古來多
 くの人が言つてゐる文章の餘韻乃至餘情は、此の洗練され單純化された具象の
 背後にひそむ言外の味をいふのであります。換言すればその作品が讀者の想
 像に任すべき多くの餘地を有することを意味するものであります。

私は前段に於て藝術的表現の本道としての描寫に就いて、其の根本的な意義
 を考へてみたのであります。今度は其の描寫の一特殊相ともいふべき活喩即

ち擬人に就いて、もう少し深く考へておく必要があると思ひます。何となれば、
 此の擬人法は所謂描寫法の叫ばれる以前からして已に文章道に重く用ひられ、
 特に擬人體なる一種の文體さへ認められるやうになつたほど、それほど私たち
 に親しみ深い描寫法の一つであると思ふからであります。

一般に物を人格化 Personify して觀るといふことは、對象その物に自己の人格
 生命を投入して之と同化し、對象の生命を認めて之と共に生きようとする態度
 をいふのであります。言ひ換へれば藝術的態度の至醇なるものであり、藝術
 的觀照の極致であります。而して之が文章又は詩歌に表現された場合、私ども
 は通常之を擬人又は活喩といつて居るのであります。作者の態度を本にして言
 ふならば、それは客觀物に對する主觀的態度の現はれであります。從來よく修
 辭學の本などに擬人法 Personification として説かれてゐるのは蓋しこれを象徴的
 表現法の一部として眺めてゐるのだと思ひます。

さて文章又は詩歌に現はれた擬人を眺めてみるに、其の例は甚だ少くないの

でありまして、先づ和歌から覗いてみますと。

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けばこゝろも靡ぬに古おもほゆ (柿本人麿)

み吉野の高城の山に白雲は行き憚りて棚引けり見ゆ (釋通観)

わが宿に月おし照れりほとゝぎす心あるこよひ來鳴きどよもせ (大伴家持)

夏草のおもひ萎えて忍ばれん妹が門見んなびけこの山 (柿本人麿)

東風ふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ (菅原道眞)

などは古い方がありますが、新しい方では

野の牛よ汝は八百年も身じろかず黙して立つや夕空のもと (茅野蕭々)

蟻と蟻うちうなづきて何か事ありげに走る西へ東へ (橘曙寛)

春月よ別れて遠きふるさとの杉の林の雫でらすか (水野葉舟)

墓よ、嫩葉のほひ胸にしむいらくしさを鳴くとはするか (太田水穂)

ほそくと萌え出でい花ももたざりき此の一本の名も知らぬ草 (若山牧水)

紫の小草がくれのかよひ路をわれに見れらし野の鼠かな (窪田空穂)

城山の松にかゝれる白藤よ淋しからずや啄木鳥の啼く (失名)

などがあります。俳句になると一層之が著しく現はれてゐるやうに思はれます。

手をついで歌申上げる蛙かな 宗 鑑

白露や無分別なるおきどころ 宗 因

西瓜ひとり野分を知らぬ朝かな 素 堂

夕時雨猿も小蓑をほしげなり 芭 蕉

鶯の身をさかさまに初音かな 其 角

元日や晴れて雀のもの語り 嵐 雪

痩せ蛙まけるなよ一茶こゝにあり 一 茶

などは古くから人口に膾炙してゐる句であります。新らしい方の句にも随分面白いものがあります。

長き夜を月とる猿の思案かな 子 規

道端やきよろりとしたる曼珠沙花 同

鼠狩れば鼠の笑ふ夜寒かな
 同
 角落ちてあちら向いたる男鹿かな
 同
 落葉して老木怒る姿あり
 同
 叩く水鶏お尋ね者の柴の戸ぞ
 秋竹
 病人と共に冬越せし蠅ならん
 虚子
 生々、と打殺されて秋の蛇
 鬼城
 霧の深きに馬は馬どち顔寄せぬ
 鳳車
 北風の赤土にかゝめる木かな
 政一郎

これ等は其一例に過ぎません。文章に於きましては、古來形容詞といふ形之がよく現はれてゐます。つまり一種の象徴的句法で、比喩に屬するものであります。例へば「歲月人を待たず」とか、「草木も眠る止みつ頃」とか「風號び浪怒る」とかいふやうな言ひ表はし方は悉く此の中に入ると思ひます。尙ほ之を最近の文學に求むれば次のやうなものがあります。

蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手をついては驚いたやうな様子をして空を仰いでみる。さうして彼は慌てたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。(土——長塚節)

鹿は牝鹿が多い。草の上に腹這つてゐるのは、大抵顔を日の方へ向け、まぶしさうに眼を細めて、口をもぐ／＼させてゐる。立つてゐるのは其涙ぐんだ大きな黒い柔かな眼をちつとさせて、物を考へぬでもない様子をしてゐる。或は絶えず何物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げるでもない、逃げないでもないといふ態度で寄つて来る。(島村抱月)

毎朝バケツに水を汲んで、其の傍を通りかゝる時には、私はきつと其の甕の中を一度は覗くことにしてゐましたが、さうした時金魚も下駄の齒音に驚いて一旦は深く沈みますものゝ、またそれがいつものだと知ると、ボチ

ヤリと尾を翻して、綺麗に澄み湛へた水面の上に、同じ水のやうな其の冷たい二つの瞳孔を向け、口をパクリと開けると、其の刹那に眞珠のやうな空気の泡が涼しい水の玉と一緒にころころとその口から轉がり出ます。それが可愛いので、私はいそいで両手のバケツを七輪の下の秋海棠のそばに下ろすとすぐに引返して、麩やパンや煎餅の碎片を細かに細かに手で揉みちぎつて投げかけずには、たゞ見棄てゝはおけませんでした。金魚の喜ぶといつたらありません。慌てた近眼でぶつかつたりふわりと鼻の上にぶらしたり、チョイ／＼とためしに引つ張つてみたり、麩と一緒に泳ぎこけたり、下から仰むきにパツクリとやつついたり、八つ尾の尻尾で跳ね散らしさまに眞逆さまに身を沈ませたりしました。(金魚經——北原白秋)

これ等は通常描寫のうまみといふ部類に入れて考へられてゐるもので、文章の中のところ／＼に擬人の態度が現はれてゐるのであります。ところが或る種類のものになると、此の態度で終始一貫、文章を押し通したものがあります。

従來所謂お伽噺或は童話とか言つたやうなものが此種の適例であります。古い所ではイソップの物語や猿蟹の合戦などがあり、近來では更に幾多の童話があります。

莢の中に豆粒が五つありました。そして仲が善かつたのです。けふもけふとて、むつまじく話しておました。

「もう外に出る日が近くなつたやうだね」

「はやく見たいな」

「外に出ても、此處で一つの莢の中で、かうしてお互ひに大きくなつたことを忘れないで、仲善くしませうね」

「ええ」

ある日の午後、ばちつと不思議な音がしました。莢が裂けたのです。豆は耳をおさへたなり、地べたに轉げ出しました。そしてばら／＼になつてしまひました。(莢の中の豆——山村暮鳥)

此の童話は、從來のそれが多く猿蟹合戦式の純ロマンチックなものであつたに反して、其の材料を實在に求め、之に即して作者の想像を展開した行き方は、たしかに童話界最近の傾向を暗示し代表するものと見て差支なからうと思ひます。作者の主観の燃焼が力強く表現されてゐる句の高い作だと思ひます。

童話以外に、矢張り此の種の態度の更に一步を踏み出したものに次のやうなものがあります。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ／＼した所でニャー／＼泣いてゐたことだけは記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ、人間で一番癡惡な種族であつたさうだ。此の書生といふのは、時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其の當時は何といふ考もなかつたから、別段恐ろしいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時、何だかフ

ハ／＼とした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落着いて書生の顔を見たのが、所謂人間といふものゝ見始めであらう。此の時妙なものだと思つた感じが今でも残つてゐる。第一毛を以て裝飾さるべき筈の顔がつる／＼して丸で藥罐だ。其の後猫にも大分逢つたが、こんな片輪には一度も出會した事がない。加之、顔の眞中が餘りに突起してゐる。さうして其の穴から時々ぶうぶうと烟を吹く。どうも烟つぼくて實に弱つた。是が人間の呑む煙草といふものであることは漸く此の頃知つた。(吾輩は猫である——夏目漱石)

これは通常「擬人體」と呼ばれてゐるもので、蓋し擬人の窮極であります。こゝまで來たとき、すべての對象は悉く化して自己の人格そのものと同一になり、我と物とが完全なる一致を遂げることになると思ひます。

次に今一つ考へておきたいのは、「自己描寫」といふことであります。凡そ文

章といふものを其の本質に立ち入つて考へてみるならば「それはすべて作者自身の生命活動といふことになるであります。そこで其の意味からぐつと押し開いて、文章そのものの形式即ち現はれの方面を眺めてみる時、それは作者自身の自己描寫であるとかう言つても、あなたがち差支はなからうと思ひます。

特に自分の行動や心持やを記述するやうな文章は、之を正眞正銘の自己描寫と見て差支へないと思ふのでありまして、たとへば次の文章などは、通常一個の所謂寫生文でありますが、事實に於て立派な自己描寫であります。

影法師

風邪をひいたので火鉢の抽出しから越中富山の薬袋を出す、効能書を読むと氣付け、溜飲、吐瀉し、船車の酔等にきく薬はあるが、風邪によいといふのが一つも見當らない。薬を一服づつ出して、もう一ぺん効能書をしらべる。中に「たんせき」といふのを見つけ出した。風邪をひいてゐる僕は、

此のせきの字に心を引かれて此の薬を飲むことに決めた。表を見ると萬病感應丸といふえらい名の薬である。僕はどうか感應があつてくれるやうにと祈る。

萬病感應丸を口に含んで茶碗の湯をぐつと口へ持つてゆく、不圖動いたものがある。僕は驚いて四邊を見廻すと、横の唐紙に自分の大きな影法師が口に湯呑を當てたまゝ映つてゐるのであつた。よく見ると口にある筈の湯呑が顔の真中に映つてゐる。天狗の鼻のやうである。ぐつと一息氣ばつて飲むと、伸び上つた咽喉に瘤のやうに映つてゐる咽喉佛の骨が、ぐつと上下へ動く。又一息飲む。ぐつと鳴つて又咽喉佛の骨が上下へ動く、又ぐつと飲む。今度はもう湯が半分しかなかつたので、咽喉佛も半分だけの動き方をする。案外現金なものだと思ふ。

今度は自分の影法師と睨めくらをする。ぢつと睨めてゐると、頬骨の映つてゐるのが何だか氣になる。首を引込めて肩を張つて兩方の頬にうんと息

をふくらし、せめて此の位に肥えて居ればよいがなあと、息のつゞくだけ苦しいのを我慢してゐる。現に自分がこれだけ肥えてゐて得意なやうな氣にもなる。

湯呑の中をのぞくと、底に丸薬が一つ残つてゐる。急にこんこん咳が出る。此の時僕の得意の影法師は姿を消してしまつて、又頬骨の立つたひとろ長い影法師が映つた。湯呑の底に残つてゐる丸薬は、又湯をさしてぐつと飲んだ。大方「おうい、皆の衆待つてくれえ」と鎌倉街道を走つて下るであらう。

火鉢の一角に坐つてゐる鐵瓶は「もう此の頃は直きに尻が冷えて困ります」といふ顔をしてゐる。(羊我)

自己描寫の根元は自己觀照に徹することを第一義としなければなりません。

即ち作者が自己自身の生活行動を客觀的にながめ、心持を内省し、その結果として自身の姿を、心持を、恰かも鏡にかけて見るが如き態度心持で描出するの

であります。そこに本當の自己描寫が出来るのであります。

さて自己の生活行動を客觀的に觀照したり、その當時の心持を考へてみたりすることは、私どもの生活の中によくあることでありまして、これは非常に興味ある、また相當に意義と價值とを有することだと思ひます。思ひ切つて大きく言へば、すべての藝術的科學的道德的生活の更新覺醒はこゝから生れるとさへ思ふのであります。文章の創作といふ方面から言へば、それは實に創作の根柢となるものであります。そこで此の自己の生活觀照の態度をそのまゝにぐつと押し進めて、窮極は自己そのものを恰かも他人の如く見なして、その行動を客觀的に描寫してみようとの欲望が、疾くから藝術家の間に考へられてもゐたし、また實現もされてゐたのであります。最近——特に自然主義の文學が失脚して新浪漫主義の文學が之に代るやうになつてから、此の種の行き方は一層盛んになつて、今や一の流行になつたかとさへみらるゝのであります。蓋し、「文章は作者自身の思想感情乃至生活の表現であり、作者自身の生命の表現で

ある」といふ眞義に徹する時、それは當然生れ出でねばならない一つの行き方であると思ひます。

私は今此の説明を一層具體的にするために、拙い私の一文を以て例に引きたいと思ひます。次にあげるのが即ちそれで、これは嘗て綴り方の時間に、尋常六年の子供と共に教室で綴つたものであります。文中に「彼れ」とあるのは無論「私自身」であることを前以て御承知おきを願ひます。

猫いらす

新天地の人ごみの中を逃げるやうにして飛び出した彼は、裁判所裏のうす暗い小路をこそ〜と通りぬけると、いつの間にか竹屋町本通りの〇〇薬店の前に立ちどまつてゐた。店の中にはいつも出てゐる爺さんの姿が見えないので、彼は一寸氣まづい顔をしたが、思ひ切つてつか〜と店の中に入りこんだ。

「御免下さる」

彼はいつもの定り文句を、思ひ切り大聲で呼んだ。呼んどだいふよりも、むしろ「どなつた」と言つた方が適當かも知れない。彼はかうどなりながら、中の方を見た。いつもの唐紙がス〜と開いて中から禿頭の爺さんが出て來ることを彼は豫想した。と遙か奥の方でハイといふ返辭が聞えた。けれども其の聲はあまり遠方なので、譬へば電話口にはじめて立つた時のやうに、先方の聲の主が男であるか女であるか、一寸判断がつかなかつた。やがて奥の方から人の足音が聞えて來た。その足音が唐紙の向ふでとまつた時、彼はそこを注視することを怠らなかつた。唐紙はいつもの通りさつと右の方へ開いた。しかし出て來たのはいつもの禿頭ではなくて、髪を櫛卷にした婆さんだつた。婆さんは今まで臺所の仕事をしてゐたらしく、前垂でしきりに手を拭きながら、彼の顔をけ〜んな目でながめ込んだ。彼は少々てれ氣味に顔を赤く染めたが、やがて平常に復した。婆さんは心持ち顔の恰好を正して

「何ぞ御用でも……」

と言つた。彼は「勿論だ」と言ひたさうな顔をしたが、その出かゝつた言葉を唾と一しよにゴクリと呑み込んだ。彼は自分が少しく興奮してゐることを自ら意識したので、強ひてそれを沈めようと努力した。そして故意と落着いた調子を見せながら

「お宅には猫いらすがありますか。」

と聞いた、その言葉が馬鹿に丁寧だつたことに気がつく、今度は反對に一寸苦笑を催して來たが、彼はまた新たな努力でやつとそれをこらへた。此の間でも彼は婆さんの目色に注目することを忘れなかつた。それには、若しか婆さんから、近頃よく流行る自殺者の嫌疑を受けはしまいかといふ、軽い世間なみな取越苦勞が餘程手傳つてゐた。が、婆さんの顔にはそんな色はしも見えなかつたので、彼は漸く安心した。

「え、御座いますが、あの……且那樣は印鑑をお持ちでございますか。」

彼は此の言葉を聞いてハツとした。今更自分の迂濶であつたことに気がつた。「成る程、毒藥を買ふには買取證が要るのだつた——かう思つたが、どうも忘れたものは今更仕方がなかつた。彼の顔には明かに困却の色が浮んだ。

婆さんは彼の顔色を讀むやうにじつと眺め入つてゐたが、やがてそれと察したらしく、

「お持ちでいらつしやいませんか、では一寸お待ちなさつて下さい。」と奥へ引込んだ。彼は婆さんの引込んだ唐紙の奥の電燈をボンヤリ見てゐると、まもなく其の下にいつもの禿頭がボカリと浮んだ。その刹那、彼はなつかしい者に逢つたといふ喜びを禁ずることが出来なかつた。實際、彼にはその禿頭がなつかしい待人に相違なかつた。彼は心の中に「もう大丈夫だ」といふ望みを懷いたらしく、その喜びの色は明かに彼の顔にあらはれてゐた。

彼のために懐かしい禿頭の爺さんは、彼の洋服姿を見つけると、いつもの通り満面に笑みをたゞえながら

「いらつしやいませ。毎度有難うさんで御座います。」と丁寧に頭をさげた。すぐ上の百燭光に照らされた爺さんの禿頭が、テカツと一しきり光つた。

「猫いらすを買ひたいと思つて來たんですが、あれは印鑑が要るさうですね。」

右手に持つた帽子を中の方から指を入れてぐる／＼まはしながら、彼は今更自分の不明を愧ぢるやうに言つた。

「へい、今頃どうも警察の方がやかましいもので御座いやすから……しかし旦那さんのは分つて居りやすから、あとから貰ひに上りやす……」

といつて、爺さんは棚の上から、寫眞のフィルムの入つた箱と同じやうな黄色な長方形の紙箱を一つ取出して、彼の前に置いた。彼はそれを手に取上げて、物珍らしさうにひねくり廻しながら

「これは何ンボですか。」と聞いた。

「へい、五十錢で御座いやす。」

爺さんは言下に答へた。彼の左の手は、その時もう上着の内側の胸ポケットにはいつてゐた。彼は引出した巾着の中から皺くちやな五十錢札を出して前に置いた。

「へい、有難うさんで御座いやす。」

と爺さんは丁寧に頭を下げ、其の五十錢札を受取つた。

彼がお定り文句の「や、お邪魔しました」といふ挨拶を残して店を出る時、入りちがひにはいつて來た男が、夏蜜柑のやうな顔をつるりと撫で、彼に一寸會釋した。彼は一寸會釋をかへしながら、

「ハテナ、何處かで見た顔だが……」

彼は矢つ張りさつきの男のことを考へながら、我が家に向つて薄暗い道を

急いでゐた。手には無論、猫いらすの小箱をしつかりと握りしめながら……

最後にもう一つ。

描寫の方法を説くに當つて之を人物描寫、會話描寫、自然描寫といつたやうな具合に、材料選擇の方面から分類する行き方が今日一般に行はれて居りますが、これは説明乃至指導の上から見て決して不都合なことではなく、むしろ至極便利なことだと思ひます。但し此の際忘れてならないことは、さうした分類が決して描寫そのものを本質的に區別するものではないといふことでもあります。即ち、人物描寫でも會話描寫でも乃至は自然描寫でも、描寫そのものには何等變るところはなく、たゞ取扱ふ題材が異なるだけのことです。又、氣分描寫とか神經描寫とか言つたやうなものも、要するに描寫の一面相に過ぎないのであります。矢張り同じく主材に基く名稱であります。だから

題材が廣く人事自然に跨つてとつたところの所謂「小説」とか「戯曲」とかに於ては、右に述べたやうな描寫の種々相が悉く包攝され綜合されて、こゝに渾然たる一大藝術を形造ることになるわけであります。

二 綴り方に於ける描寫の指導

人物の描寫と其の指導——會話の描寫と其の指導——
自然の描寫と其の指導——擬人の指導——自己描寫の
指導

先づ人物の描寫から入ることに致します。人物は元來が動的なものゝある關係上、これが描寫は兒童の最も好むところであり、又最も入り易いところでもあります。随つて兒童の藝術的な表現に於て、人物の出て來ない場合は甚だ少いと申してよからうと思ふのであります。

さて人物の描寫に於て——敢て人物の描寫に限るわけではありませんが——

最も大事なことは、描かうとする人物の特徴をうまく掴むことであります。人物描寫の生命はかゝつて先づ此の一點にあるのであります。

ところが子供の實際はどうであるかといふに、前に兒童の綴り方生活と其の發展のところでも述べたやうに、むしろ幼學年の子供ほど大膽に率直に對象の特徴を捉へるやうであります。此の點は大人の或る時期のものはまさに顔色なしだと思ふのであります。だから指導の如きも幼學年では別にむづかしいこととはなく、たゞ適宜に對象を選択させ觀察させて後之を綴るやうに仕向ければそれでよいわけであります。次にあげるのは、さうして綴つたのであります。

ボクノオトウサン

ボク ノ オトウサン ハ、マイアサ ボク ガ ネテ キル ウチ ニ
オキ テ、カイシヤ ニ オイデ ニ ナリマス。カイシヤ ハ カイダ
イチ ノ ハウ ニ アル ノデ、オトウサン ハ キシヤニ ノツテ
マイニチ イツタリ キタリ ナサイマス。

オトウサン ガ カイシヤ カラ オカヘリ ニ ナル ノ ハ、マイ
ニチ バン ノ 五ジゴロデス。オカヘリ ニ ナル ト、スグ ニ フ
ロ ヘ ハイツテ、ソレ カラ ボクラ ト 一シヨ ニ ゴハン ヲ
オタベ ニ ナリマス。ソレ カラ ナツ ハ ナガイス ヲ トホリ
ヘ ダシテ オスズミ ニ ナリマス。トキ ニハ トナリ ノ ヲヂサ
ン ト ゴ ヲ オウチ ニ ナリマス。ソノ トキ ハ ヒト ガ タ
クサン ミ ニ キマス。イマゴロ ハ、スコシ サムイ ノデ、ウチノ
ナカ デ マイバン ヒヤウタン ノ テイレ ヲ ナサイマス。
ニチエウビ ニハ ボク ト ニイサン ヲ ツレテ、ツリ ニ イツタ
リ、ヤマ ニ ノボツタリ シテクダサイマス。(二年男)

私のお父さん

私のお父さんは左からかみをわけていらつしやいます。そしてあたまのま
ん中に小さなはげがあります。お父さんは朝ねぼうで、いつも私がかくか

うへいつてしまつてからおおきになります。お父さんが銀行からかへつていらつしやるのは、いつも五時ごろです。そしてなつはかへるとすぐようふくをぬいで、きものをはしよつて、おにはへ水をおまきになります。冬は自ぶんでこたつをこしらへて、その申へおもぐりになります。そして中で、はやくごはんにしろくといつて、せかしていらつしやいます。お父さんはそとをおあるきになる時に、いつもきまつたやうに下をむいておあるきになります。それでこの間うちのねいやが、だんなさま、そんなことをしておあるきになつても、お金はおちてはゐませんよといひました。お母さまは、ほんとにさうですよと、わらつていらつしやいました。お父さんは朝ごはんだけは、ばんときゆうにゆうでおたべになります。そしてばんにはすこしおさけをおのみになります。(二年女)

尋常三年頃から四年頃にかけては、いよく客觀的表現の高潮時代に達します。すので、所謂自由作の間にも、人物の描寫がだんく多く現はれて参ります。

随つて此の時期に人物の特徴の掴み方を少しく念入りに指導することは、大切なことであると思ひます。

人物の特徴の掴み方に就いてとりわけ注意すべきことは、あまたある特色の中から、特に本質的なものを選ぶといふことです。衣服の縞柄とか帽子の形とかいつたやうなものを漫然と掴まへたのでは何にもなりません。掴まへるなら同じ衣服でも其の好み、その着方に注目しなければなりません。帽子ならば矢張り其の好み、乃至其の冠り方脱り方に目をつけることが大切です。人によつて、それ等には凡そ一種の趣味が現はれ、癖が出てゐるものです。その他言葉音聲、顔乃至頭の特徴、歩みぶりと言つたやうなくさくの特徴を十二分に注目し洞察し把握して、之を如實に描き出すことが大切であります。出来るならば、その文を読んで其の人を停車場の人ごみの中に探しあてるやうにありたいものです。昔親の仇を討ちに出かける人たちが、皆申し合せたやうに相手の顔にあるほくろや刀傷を唯一の目あてにして、全國をさがし廻つたといふこと

は、もとより講釋師の扇子の先きから叩き出された嘘言が大部分であるとしても、描寫法の上から見ると誠に面白い材料だと思ふのであります。次に尋常三年乃至四年の作品を一二例あげてみませう。

僕の弟

僕の弟は今年六つになる。いたづらが何よりすきで、しじゆう僕等をこまらせる。此の間僕の帳面にひげむくぢやらの顔が書いてあつたから、弟にさう言つたら「知らんよ」といつて逃げて行つた。又きのふは姉さんの机の引出しに、むかでの殺したのが紙に包んで入れてあつたので、姉さんは「ひやア」と言つてびつくりした。その時庭の築山のかげから、くすくす笑つてこちらを見てゐる弟の顔が見えた。あれも弟が入れて置いたのにちがひない。

弟はまたおどけものである。時々お父さんのきせるをもつて、煙草をすふまねをして皆に笑はれることがある。これもつい一月ばかり前のことであ

つた。うちにお客さまがあつた時、弟はお客に來たをぢさんの帽子をかぶつて、靴をはいて、ステツキをふつて玄關の前の庭をあちらこちら歩いてゐた。それをお母さんが見つけて「早くおかへしなさい、大變ですよ」とおつしやつたが、弟は「いゝよ」と言つて、矢張り歩きまはつてゐた。そこへお客様がおかへりにならうとして、玄關においでになつた。すると弟は、大きな靴をはいて、あわてゝかけて來たが、お客様に「をぢさん、ちよつと借りたよ」と言つたので、お客様もお父様も大そうお笑ひになつた。

(尋三男)

私の妹

私の妹は今年五つです。お人形が大のすきで、ねる時はいつもお人形をだいて寝ます。遊びに行つた留守の間に、人が其のお人形をさはつたりすると、かへつてから大きなこゑを出して泣きます。此の間朝ごはんをたべる時、お人形をだいてゐましたら、どうしたはずみか、お茶わんをとり落し

て、お人形の頭からおつゆがかゝりましたので、又泣き出しました。みんなくすくす、笑ひながら、だまつて見てゐると、妹はお人形をだいて泣きながらお座敷の方へ行きました。暫くしてかへつて来た時には、もうきげんを直して「うちアお人形の顔洗つてあげてよ」と言つて、にこ／＼してゐました。見るとお人形の顔は皮がすこしむけて、片方の目がなくなつてゐました。(尋四女)

尋常四年の半ば頃から、人物描寫の筆はいよ／＼熟して、具體の特殊化が更に一步進んで具體の單純化にまで進んでまゐります。みんながあらゆる方面にこゝまで行けば、もはや小學校に於ける描寫の筆は、それ以上多くを望む必要はあるまいと思ふのであります。

かき

つゝみがひらかれた。みんなの目が、一せいに、つゝみの中のものに、そいがれた。中には眞赤なりんごが二つに、赤いかきが五つ六つはいつてゐた。

「あたゐこれ。」「これがある。」「これがいい。」
小さな手や、大きな手や、ほねばつた手が、みんな、赤いのをよつてどつた。まづむつちやんのがむかれはじめた。母様のふとつた手にもたれたナイフがきらりと光つた。する／＼と、きもちよくかはがむける。だん／＼かはがのびてゆく。さくつとかきが二つにわられて、中のしんが三角にとれた。……前出、以下省略(四年女)

私のお父さん

いつもたばこばかり吸つてゐらつしやるせいか、おだんごのやうに丸い鼻のさきが、ほうづきのみやうに赤くなつてゐるお父さまは、その赤い鼻の頭にすこししわをよせながら、しじゆうクン／＼言はせてゐらつしやいます。ゆうべもお茶をもつてお父さんの書さいにゆくと、お父さんは、へや中を一ぱいけむりにして、その中で相かはらすクンクン言はせてゐらつしやいました。私はたばこのけむりにむせてしまつて思はずせきがこん／＼

と出ました。それでにげるやうにして書さいを出ると、あとからハ、ハ、といふお父さんの笑ひごゑがきこえました。

お父さんは御きげんのよい時には、いつもきまつたやうに眼がねをはづしてにつこりとなさいます。目がねをかけていらつしやる時には、あたり前に見える目が、眼がねをおはづしになると、三月月のやうにほそい目になつて見えます。ねえさんは、其の細い目を見つけると、きまつたやうに何かおねだりをなさいます。するとお父さんは、「またはじまつたナ、よしよし」といつて、その細い目を一そう細くして、につこりとお笑ひになります。お父さんの目は、お父さんの御きげんをはかるかんだんけいのやうなものです。(四年女)

尋常五六年以後にもなつたら、單なる人物描寫でなしに、或は自然の中に、或は人事、事件を主材として、其の中に人物の描寫を生かして、もつと一般的な総合的な描寫の修練をしてゆくやうに導きたいものであります。

會話の描寫は人物の描寫の中に當然出て来る筈のものでありますが、しかし對話だけで文章の筋を運ぶ行き方もあるのでありますから、尋常三年或は四年あたりで特にさうした行き方を試みさせることも面白いと思ひます。

日曜の朝

「次ちゃん早く起きいや。」

「むにや〜。」

「起きにやお母さんに言つたるで。」

「ほんならもう五分間。」

「よしほんとうで。」

「ほんとうよ。」

「ちよつと時計を見てころか。」

「あゝねむたいの。」

「はあ五分で、早く起きい。」
「ああもう一分間。」
「もうすぐ十時で。早く起きいや。」
「起きるかい。」
「起きにやあしりをぶつてやるんだ。」
「わあしりをぶたれてたまるもんか。起きる〜。」
「ほんとに早く起きいやあ。」
「うんとこどつこいしよ。今何時かいの。はあ十時半か。」
「きまつとらあ。」(三年男)

けんか

(一人の男の子)「おい、わりやわしのぼうしをかくしやつがたの」
(ほかの男の子)「ふん、わしはあんたのぼうしなんか、かくしやせんぞ」
「それでもぼうしがないじゃないか」

「しらんよう、あんたがそこにほつておいたじやないか」
「わしがやあ、うそを言ふな。」
「どうしたんや。そこへほつておいたじやないか」
「ないじやないか。どこにあるんや。あるんなら早くもつてこい。」
「目の前にあるじやないか。そこにあるじやないか。わしはしらんよう、もういぬるでえ」
「なまいきなう。明日ぶしやげてやるぞ」
「かつてにぶしやげえや。あらもう五時か、いのうかい」
「われみたいたなばかは、いにやがれ」(三年男)

かくれんぼ

「もうい〜の」

「まだよ」

「おそろのね」

「だつてまだかくれないのだもの」

「ではもう少しかぞへるよ」

「え」

「一、二、三、四、五、六、七、八、……………」

「もういゝよ」

「どうれ物置の中にかさ／＼音がしたからさがして見よう……………もういゝの」

「もういゝよ」

「やつぱり物置にちがひない……………や、みつけた、清ちゃん、花ちゃん、二人でちゃんけんして負けた方がおによ」

「あはゝゝゝゝゝゝ」(尋四女)

會話の描寫に就いて一つの考慮の中に入れておくべきことは方言の問題であります。方言を綴り方の中にとり込むことが、その文章に郷土的色彩をもたらす上に有効なことは茲に申すまでもありません。たゞしかし、單に方言をその

まゝ寫實的に取込んだだけでは、それは遂に機械的な描寫でありまして、藝術の本義と相去る遠いものであります。よく其の方言がもつ郷土的特色を巧みに捉へて、之を適宜に文中に生かせば用は足りるのであります。小説家あたりの使ひ方でも多くは物賣りや百姓達の言葉尻に其の土地の訛又は方言の色調を一寸帯ばしめるといふ程度のものであります。要は或る地方色を出すために、如何なる方言の如何なる部分をとつて、その特色を如何なる程度に利用すべきかに研究の問題は横はつてゐるのであります。指導の眼目も亦實にそこにあると思ふのであります。この意味から言へば、前の例の中「けんか」の文などは、未だ大いに指導の餘地を存するわけであります。

尙對話として取込む以外の方言——即ち地の文に現はれる方言に就いては、低學年では或る程度まで許容、やがて漸次に之を標準語に化してゆくといふ點のみを言へば、それで足りると思ひます。

次は自然の描寫。これは先づ生き物、所謂動物の描寫から這入ることが最も自然で、兒童の心の發達にも合つてゐると思ひます。それならば尋常一年でも結構出来るのであります。

ニハトリノケンカ

ランドリ ガ ニヒキ デ ケンカ ラ ハジメマシタ。ケ ラ サカダ
テテ、クビ フ ノバシテ ムキアツテ キマス。リヤウホウカラ ダマ
ツテ、オナジャウ ニクビ フ アゲタリ サゲタリ シマス。
ソノ ウチ ニ、アカイ ノ ガ イキナリ トビツイテ、クロイ ノ
ヲ ケルト、クロイ ノモ マケズ ニ トビツイテ、アカイ ノ ラ
ケリツケマス。二三ベン ケリアフ ト、マタ ハナレテムキアヒマス。
ソレカラ ハ ドチラモ ウゴカズ ニ タダ ニラミアツテ キマス。
クビ ノ ケガ タツタリ ネタリ シマス。(一年男)

ウシ

ウシゴヤ ニ ネテ キル ウシハ、アサ カラ バン マデ、ユメ フ
ミテ キル ヤウ ニ、メ フ ホソク シテ、クチ ダケ モグモグ
シテ キマス。カラダ ニ ハヘ ガ トマツテ キテモ、ヘイキ デス。
ヒト ガ イツテモ、カゼ ガ フイテモ、オキヨウ ト シマセン。ウ
シハ ウゴク コト ガ キラヒナ ノ デセワ (一年女)

ところが、所謂「叙景文」とも言ふべき自然描寫も亦、やり様によつて尋一からして随分いゝものが書けると思ひます。

ユキノフルヨ

ユフガタ カラ フリダシタ アラレ ガ イツネ マニカ ユキニ
カハリマシタ。マツクラ ナ ソラ カラ ハナビラ ノ ヤウ ナ ユ
キ ガ チラチラ ト オチテ キマス。ミテ キル ウチ ニ、ニハ
ノ 木 ノ エダ ガ、ダンダン 白ク ナリダシマシタ。センスイノ
中 ニ オチル ノ ハ、デキニ キエテ クロク ナリマス。センス

イノ中ノイシハ、アタマガ白クナツテ、ホシタウニシ
マノヤウデス。

ボクガエンノハシラニツカマツテ、カタホウノ手デ
ユキヲトラウトシマシタガ、チキニキエテナカナカト
レマセンデシタ。アマドヲシメルトキ、オトウサンガ「アス
ハオホユキダ」トオツシヤイマシタ。(一年男)

ユキノアサ

メガサメテミルトユキガマツシロニフツテキマシタ。
イヘモヘイモイシドウロウモマツシロデス。マツノ木
ニツモツタノハ、オマンヂユウノヤウデス。ウメノ木
ニツモツタノハ、カレエダニハナガサイタヤウデス。
オダイドコロノエントツカラデルケムリガケサハアカ
チヤイロニミエマス。オモテテハオトウサンノユキヲハ

イテイラツシヤルオトガシマス。サカヤノコゾウガ、ユキ
パウズノヤウナカツコウヲシテ、オダイドコロニトビコ
ンデキマシタ。(一年女)

ユキフリ

アサカラユキガフツテキマス、ワタヲチギツタヤウナ
ノガ、クルクルマヒナガラヂメンヘオチタカトオモフト、ス
グキエテシマヒマス。アトカラアトカラト、スヒコマレルヤウ
ニキエテシマヒマス。オモテヲトホルヒトハ、大テイマン
トヲキテ、カラカサヲサシテキマス。カラカサノウヘニ
モユキガツモルノデマルデシロイカサヲサシテユク
ヤウデス。ムカウノホウハユキフリデボンヤリミエマス。
イヘトヤナギノ木ダケガクロクミエマス。(一年女)

尋常一年の自然描寫としては、先づこんなところで満足すべきではなからう

かと思ひます。

夕方なりました。

うちの前をつうしん学校のせいとがとほるのでにぎやかです。今日からあすにかけてあびす様のおまつりです。今いちの中からおちいさんがまんとをきて、けいとほうしをかぶつて、さかなをしんぶんにつゝんだのを、をのところにぎつて出て來ました。むかふからこともがざるをあたまにかぶつて、うたをうたひながらあるいて來ました。そのあとからこもりが「ねんくよう」とうたひながらあるいて來ます。つうしん学校のせいとが、大ごゑで何やはなしながらあるいて來ます。さつきざるをかぶつてとほつたこともが、こんどはおとうふを入れてかへつていきます。もう人がだいぶんすくなくなりました。角どろろに火がつきました。(尋二女)

アサガホノメ

私ノウチニハ、マイ年、アサガホヲツクリマス。コトシモツクラウトイフノデ、オトウサンガタネヲオマキニナツタノハ、十日ホドマヘノコトデアリマシク。
ケサカホヲアラフトキニハヲ見ルトシヨボシヨボト
アメハフル中ニマツクロナ土ヲモチ上ゲテ、アサガホ
ガメヲ出シカケテキマス。カタクチチコマツタハハサキ
ニマツクロナバウシヲカブツテ、土ハ中カラソラヲ
ハジクヤウニシテキマス。ヨク見ルトアソコニモココ
ニモ、土ガトコロドコロモチ上ツテキマス。
アスノアサニナツタラ、キツトアサガホノメガミンナ
出ソロウデセウ。(二年女)

尋常二年でも、あまり大した期待をかけることは無理かと思ひます。唯やはり、観察の緻密なところを推賞もし、買つてもやらねばなるまいと思ひます。

尋常三年からは、前にも述べた通り客観的表現の高潮期に入りますから、ここでうんとさうした方面の指導が必要かと思ひます。方法としては自由作も結構であります。矢張り廣い意味の課題も必要だと思ひます。尙此の種の優良な作品を味はせることは、より以上に必要であります。

どんびき

水をまいたお庭をみてゐると、どんびきが、のそり／＼と、でてきました。その時、せみが家の中へはいつてきたので、ねえちやんが。せみをお庭に、おなげになりますと、そこにゐたどんびきが、大きな口をあけてぱくりとのみこんでしまひました。せみはおなかの中でじい／＼とないてゐます。どんびきはおどけたかほをしてゐましたが、なにを思つたか、のそり／＼とあるき出しました。(三年女)

夜の道

空には一めんに星がかがやいてゐる。向ふの木の上に出てゐる月が、僕と

一しよに歩いてゐるやうに見える。「ちん／＼ごうつ」と電車が走つて行く時々いなびかりのやうに「びかつ」とまつ暗な道が青く光る。電車通へ出ると、後の方から二つの大きな目玉がいきほひよく走つて来て、僕を追ひこして「ぶう」といひながら向ふの小路へきえてしまつた。ふと氣がついて空を見ると、さつきの月がやつぱり僕について来る。僕がとまると、月もとまる。「をかしいなあ」と思ひながら僕は又歩き出した。(三年男)

梅雨の日の午後

しと／＼と降る雨の中に、ゆめのやうな煙が、障子の破れからむく／＼と出て来ては消えてしまふ。庭になげた紙舟もとろりとなつて、木の根にかゝつてゐる。にはとりが軒の下に来て、ぬれた羽をばた／＼さしたきり身動きもしない。庭のくぼみには水が一ぱいたまつて、小さい池のやうになつてゐる。木の葉のしづくが落ちるたびに、ぼちやんと音を立てる。急にむし暑くなつたと思つたら、夕日が雲の間から強い光線をなげ出した。

庭の水だまりがきら／＼光る。と、鶏は思ひ出したやうに畠の方へかけ出した。そして露のかゝつた草むらを、コ、コ、と鳴きながら餌をあさつてゐる。をんどりが一しきりときをつくつた。(尋五男)

雨

朝から降りつづけた雨は、夕方になつてもまだやまない。おかげで今日は一日籠城した。つまらない日だつたなあと思ひながら、僕は窓にひちをついて外を見つめた。

外は蓮田である。細い糸の様な雨が蓮の葉をたたくやうに降ると、やがて葉の中ほどにたまつて、銀色の玉が出来る。そのうちに、銀色の玉がだん／＼大きく、平たくなつたかと思ふと、とろ／＼と葉をすべつて、下の葉へ落ちる。下の葉はいやと言ふやうに首をふつて、その玉を次の葉へこぼす。玉のこぼれるたびごとに、ポト／＼と小さな音がする。その音が、あちらでも、こちらでも、はてしなくつづいて聞える。小さな音とともに、

たえず首をふつてゐる葉のすがたが、つき／＼にまるでまねいてゐるやうに見える。いつまでもさうしてゐるのを見てゐるうちに、ひちがだるくなつたので、窓をはなれて「ああ」と、あくびをしながらひちをのばした。雨はまだなか／＼やみさうにもない。(尋五男)

雨のふる日

「あゝ」と大きな欠伸をして椅子から身を起したお父さんは、店の方へお出でなつた。読みかけた本を下において、ふと庭の方を見ると、いつの間にか降り出したか、絹糸のやうな雨が百合の葉にかゝつて、葉はゆらり／＼と静かにゆれてゐる。あまりむし暑いので、窓を明け放した。さつきから手にとまつたり、足にとまつたりして、うるさくつきまとうてゐた蠅が、鹽梅よく窓のふちにとまつたので、そつと近よつて力まかせにはじいた。死んだと思つたらポツと飛んで、百合の花の雌しべの下にとまつた。ぬれた翅を足でこすつて、花の筒の奥の方へ走つて行つた。小さな蟻があつちの

葉へ行き。こつちの葉へのぼりして、根もとの方から百合の莖を上へくと上つてゆく。

雨はいつの間にかやんだと見える。松の葉を傳うて先の方へたまつた雨水が、やがて池の中へ落ちる。雫が池へ落ちると、下からは鯉が餌かと思つて、すうつと浮んではばくついてゐたが、今度目の雫が鯉の鼻の先へポタリと落ちると、「ちやぶ」と音を立て、鯉は沈んでしまつた。(尋六男)

春の朝

きのふの雨は名残なく晴れて、今日は麗かな天氣である。二階の窓から下の通りを見おろすと、道にはまだところ／＼に水たまりが残つてゐて、家の中からかけ出した鶏が二三羽、おいしさうにその水をのんでゐる。眞向ひの酒屋の庭には、大きな甕のならんでゐる傍に茶色の番傘が四本ほしてある。そしてどれにも丸の中に川といふ字が書いてある。屋根の上からついとおりていつた石たいき(鳥)が、土を叩くやうに尾を動かしながら、

傘と傘との間をあるいてゐたが、何に驚いてか「ビリ、」と一聲ないて、波形に向ふへとんで行つた。

酒屋のとなりの二階では、おばあさんが蒲團を持ち出して屋根の上にほしてゐる。おばあさんのあとからついて來た猫が、尾を立て、甘へるやうにおばあさんの足へからみつくつと、おばあさんはうるささうにその猫をつかまへて部屋のの中の方へ投げ込んで、もう一枚の蒲團をまたひろげた。八丈縞の太いがらに、春の目がきもちよく當つてゐる。二階の向ふの方は一面の麥畑で、青だゝみをしたやうな中に、ところ／＼四角な菜の花の畠がまじつて、黄色いかるたをまきちらしたやうだ。麥畠のふちを縫うて赤いれんげ草が、はるか向ふにつゞいてゐる。

すつと向ふは川の土堤で、一軒の百姓家をとりに圍んだとき色の塊りは桃の花であらう。その上には紫色の遠山がうつすりと裾をひいてゐる。「コケツコツコ」と急に鶏の騒ぐ聲がするので、はつと驚いて見ると、いつもこゝ

らをうろついてゐる野良犬が又やつて來たのだ。酒屋のをちさんが石を拾つて投げると、當りもしないのに「きやん」といつて尾をまいて逃げて行つた。白い蝶々が二羽、上になつたり下になつたりして、もつれあつて道のあたりを飛んでゐたが、やがてひらくと屋根を越えて向ふの茶畑の方へ飛んで行つた。はるか向ふの空に雲雀のこゑがきこえる。(高二男)

自然美の描寫で何よりも大切なことは作者が自然の暖かいふところにはいつてゆくことでありませう。即ち、作者が自然の現象にちいつと眺め入ることによつて、作者の生命と自然の生命との接觸交融が遂げられ、作者自身の中に自然を見出だし、自然の中に作者自身を見出だすといつたやうな境地が醸成されませう。そこから生れた作品そのものが、本當の自然描寫であります。

元來、自然の現象は唯一見しただけでは、極めて亂雑な、無心な、一の物理的存在に過ぎないかも知れません。しかし、それは所謂科學的な見地に立つた觀察であつて、一たび之を藝術的觀照の目を以て見る時には、その一見無心に

見え、亂雑に映する自然そのものの中に、私たちは意外なる或る物を發見するであります。それは實に自然の生命ともいふべきものであつて、一木一草はもとよりのこと、一塊の土くれや、石ころに至るまで、悉くそれがあらはれてゐるのであります。春夏秋冬、朝晝夜、といつたやうな時の流れ、空間を占領する場所、見る人の位置、それ等によつて千態萬狀の變化の、美が顯現されるかと思へば、一方では又其の中永久に變らざる統一の美も味はれます。「變化」と統一之を科學者に言せれば、單に自然の現象と片づけてであります。藝術家の目にはそれが神の思召による大自然の法則とも見られるのであります。而して此の大法則の顯現するところにはあらゆる形容を超越した自然の美——神の創造になる大藝術が展開されるのであります。自然は、神の藝術は此の大法則に従つて刻々に動きつゝそこに變化の美即ち宇宙の現實性乃至特殊相を現はし、同じやうな變化を繰返すことによつて、そこに統一の美即ち宇宙の普遍相或は宇宙の悠久性、永遠性を顯現して見せます。之に生命を認め、之に温かい

情を感じるに何の不都合がありません。此の生ける自然の世界を、否自然の生ける生命を、あるがまゝに描き出したものが即ち自然美の描寫であらねばならぬと思ひます。しかも、それは單なる自然現象の一刹那を寫眞的機械的に模寫したのではなく、又自然現象の或る場面を切りとつてそのまゝ持つて來たものでもないのであります。そこには作者の藝術的觀照眼といふ一種の主觀を通じて選ばれた自然の特殊相——あまたある具體の中の特殊な具體、單純化された具體が、作者獨得の觀照世界に於て創造された藝術品としてその姿をあらはしてゐると見るべきであります。自然描寫指導の要點はまさにそこにあるのであります。

擬人の指導は、換言すれば、題材、人格化の指導であります。此の種の指導は特別に之を行はなくとも、子供は童話その他の讀物から影響を受けて自然に此の態度に導かれるものが少くありません。又、子供本然の物の觀方が純眞に根

ざすところから、ひとりでに此の態度をとる子供も少くないのであります。次に尋常一二年に於けるかうした種類の行き方の例をあげてみたいと思ひます。

キンギョ ノ センセイ

オイケ ノ キンギョ ガ、ガクカウゴツコ ヲ シテキマス。センセイ
ガ サキ ニ イクト、セイト ガ アトカラ ソロソロ ツイテ イキ
マス。

オハカマ ガ ズリマシタヨ、センセイ、オナホシナサイ。(一年女)

私のくつ

私のくつは一年のときから、がくかうへゆくにも、よそへゆくにも、よくおともをしていきました。あんまりはたらきすぎたので、おなかのかはがやぶれて、だるさうになりました。もうこの上はたらかせるのは、かはいさうでしたから、びやういんににふいんさせて、おなかのやぶれをなほし

でもらひました。そして、すっかりもとのやうに、げんきになりました。又もう一どはたらくといひますから、こんどは私より小さな かはいとおじやうさんのおけらいにしてやりました。たいさうかはいがつてくださいますから、きつと私のときのやうに、よくはたらくでせう。(二年女)

所謂お伽の世界は、かうした見方から出發したものでありまして、お伽が兒童に喜ばれる所以も亦そこにあると思ひます。私は嘗て尋常六年の子供にお伽の創作を試みさせたことがありましたが、子供は自分の経験界に題材を求めて之をお伽化することに非常の興味を有つたやうでありました。次にあげるのはその成績の一部であります。

カレンダー

二十一日のカレンダーの紙は次の日の紙に向つてなげきました。

「もうすい分暗くなりましたね。もうそろそろ、私もこゝを離れなくてはなりませんね。明日まで此のうちの人が忘れてゐて呉れればいゝのね」

と自分の残り少い身を悲んで言ひました。次の日の紙は

「ほんとにね。もうお別れしなければなりませんね。此のうちの人つたら、暗くなるとすぐめくつてしまふんですもの。ほんとにお氣の毒ね。でも、

私も明日は御同様にね、」

と同情するやうな、又自分にも同情して貰ひたいやうな顔をしてかう言ひました。がしばらくして

「だけど、私もうあきらめてゐますわ。それよりも若しか此の先が今よりもつと楽しい世界だつたら却つていゝぢやないの」

かう言葉をつくと、彼女の顔は急に晴やかな血色にかへりました。

「それもさうね。……さうだと本當に嬉しいわね。……あゝ、もう此んないやな話はやめにしませう。」

「えゝ」

それから二枚の紙はもうだまつてしまひました。外の紙も、もとより目を

とちてちいつと黙り込んでゐるのでした。(尋六女)

薄と萩

山かげにすゝきとはぎが並んで生へてゐました。ある夜のことです。それは大空に丸い月が出て、松蟲がちんちろくと鳴いてゐる晩でありました。二人はすゞしい夜風に袂をふかせながら語り合ひました。

「ねえ萩子さん、今晚はいゝ月ね。私はこんな晩にすうつと世界を廻つて見たいわ。此の間わたしの前の小松の枝にとまつて休んでいつた頬白の話にね、これからすつと向ふへ、丸い山を三つばかり越えて行くと、そこには大そう賑やかな町があるつてよ。わたし、そんな賑やかな處へ行つてみたいわ。あなた行つてみたいことなくつて……」

「それは私も賑やかな所へは行きたいわね。でも尾花さん、若し行くとしたら、もう此處へは歸つて來られますまい」

「それはさうですとも、此んな淋しい山かげへなぞ一生歸らなくつたつて

いゝぢやありませんか」

「でもね、わたしは……」

萩は首をたれてそれからあとは言ひませんでした。そして、目には白い涙の露がきらりと光りました。薄はそれに氣がつくと急に外の話をはじめました。

「それはさうと萩子さん、明後日の晩は十五夜でせう去年の十五夜には、前の廣つ場で松蟲さんや鈴蟲さん達が大きい集つて、大演奏會がありましたわねえ、今年も亦あるといゝわ」

「えゝ、今年もあるさうですよ。此の間わたしの處で鈴蟲さんと松蟲さんとが落合つた時、そんな話をしてゐましたつけ、今年に向ひの山からは、た、お、り、さん、も、見、え、る、ん、で、す、つ、て」

「あら、さう。嬉しいわ。早く明後日の晩になればいゝ」二人はかうして、西の山に月の傾くまで語り合ひました。

あくる朝になりました。向ふの栗林に朝日の上る頃二人は目をさました。すると薄は突然身ぶるひをしながら、頓狂な聲で叫びました。

「あつ、大變だ、誰か助けて……」

萩はびつくりして、その方をふり向きました。するとどうでせう、前にはギラリと光る利鎌を持った男が、鋭い目できよろ／＼あたゝを見廻しながら突立つておました。薄はいつのまにか、その男の大きな手に堅く握られてゐるのでした。萩は目がつぶれる程びつくりして、覚えすぶる／＼と身ぶるひをしました。体内の血がみんな一ぺんに毛穴から外へ出てしまつたやうな氣持がして、身體中びつしより冷汗をかきました。

やがてその男は薄を手にしたまゝ、右手に利鎌をぶらさげて、のし／＼向ふへ歩き出しました。薄は消え入るやうに悲しい泣聲を立てながら、男の肩から手を出して萩に別れを惜みました。萩は兩方の袖を高くあげて打ち振りながら、薄を見送りました。やがて薄の姿も、その薄を手に持つた男

の姿も、山のかげにかくれて、見えなくなつてしまひました。(第六女)

さて、此の種の行き方の、更に究極にまで進んだものに、所謂「擬人體」の文章があります。形から言へば、國語讀本の中にある「ナゾ」の文章や「一本杉」の文章などがそれでありました。此の の行き方も、大體兒童がひとりで之を試みるやうでありますから、ほつておいてもよいやうなもの、しかしこの行き方には相當指導を要すべき點もありますから、時には一齊に之を試みさせることもあながち悪いことではないと思ひます。

所謂「擬人體」の文章は尋常一年の後半期から之を綴らせることが出来ると思ひます。私は嘗て讀本の中に出てゐる謎の文章を取扱つた後、子供に「ナゾ」を創作させてみました。併しながら、元來謎そのものゝ本體は、科學的觀察に基づく知的興味を主としたものでありまして、或る物の名前をかくして、其の形態性質等各方面を構成する必須條件をあげ、之を手がかりとして匿した名前を發見せしめるといふことになつてゐます。随つて謎を解き得た喜びといふも

のは、算術の應用問題を解き得た喜びと略同じ性質のものであると思ひます。たと讀む人——解く人が尋常科の低學年兒童であるが故に、其の表現の上に藝術的手法を用ひて、所謂擬人體にしたものであると思はれます。この意味から考へると、謎は一種の「科學の民衆化」乃至「科學の兒童化」を意味するものだと言つてよからうと思ひます。——こゝまで考へ及んだ時、兒童に綴らせる「ナゾ」そのものは程度の上に於て餘程考慮の餘地があるやうに察せられます即ち此の時代の兒童の頭は科學的の見地から見ても甚だ幼稚でありますから、「ナゾ」を解くことは出来ても、大人が望むやうな完全な「ナゾ」を創作構成することは不可能の事に屬すると思ひます。大人の構成した謎は匿された物の有つてゐる必須條件を以て満たされてゐますけれども、子供の構成した謎にはその條件の必須なるものゝみを要求するわけに行きません。そこで私は極く軽い程度に於て其の條件を認め、必須でなくとも、不合理でありさへしなければ差支ないといふ程度で之を許すことに致しました。そして今一つの要素たる一題材の人

格化といふことに、より多くの望みを囑し、そこからして彼等兒童の藝術的觀照眼を誘致しようと試みたのであります。次にあげるのは、其の當時子供の綴つた謎の一例であります。

ボクハ

ボク ノ カラダ ハ シヤクシ ノ ヤウ ナ カツコウ ヲ シテ
 キマス。イロ ハ セナカ ガ チャイロ デ、ハラ ガ スコシ シロ
 イ デス、ハラ ニ ハ 四ホン ノ イト ガ ハツテ アツテ、イト
 ノ リヨウ ワキ ニ ミカツキガタ ノ 目 ヲ モツテ キマス。イ
 ト ノ サキハ 一ボン ノ アシ デ ニギツテ キマス。イツモ ト
 コ ノ 上 ニ サカサ ニ ナツテ、タツテ キマス。ヨル ニ ナル
 ト、トキドキ ウチ ノ ヲヂサン ガ ボク ヲ モチダシテ、ヒザ
 ノ 上 ニ セテ、ボク ノ ハラ ノ イト ヲ 三カク ノ イタ
 デ カキマゼマス。スル ト、ボク ノ ハラ ハ、ピンシヤン、ピンシ

ヤン ト ナリマス。ボク ハ ナン、デセウ (尋一男)

尋常二年頃になると、此の種の行き方——擬人の態度——は兒童の一層好む所となつて、彼等の藝術的觀照乃至想像がいよゝ深まつて來ます。次にあげるのは尋二の兒童が綴つた一例であります。

私は月です

私はいつも世界をてらしてゐます。私のからだは時にまるくなつたり、またふねのかたちになつたりします。私のからだの中には、うさぎがお餅をついてゐるかたちの模様があります。まい年八月十五日のばんには、人が私におだんだの、くりだのをそなへて、おいはひしてくれます。それを人は十五夜のお月見といひます。私はいつまでたつても、やはりわかうございます。私が出ない時を人はやみ夜といひます。秋になると、たくさんの人がれつをつくつて、私を見ることがあります。それはまことにきれいでございます。私はいつも下を見てゐます。上から下を見下ろすと、人は

あたまが一ばん上にあつて、そのつきにはらがあります。二本のあしはその下でさきになつたりあとになつたりして、かけまはります。

私はあるばん、ふしぎなものを見ました。それはさむい／＼ふゆのばんのことでした。あたまに手ぬぐひをかぶつて、きもの／＼みじかいのをきて、はだして走つてよそのうちへはいりました。なんだかへんな人だと思つたので、私はその人のでゝ來るのをにらみつけてゐました。するとしばらくたつて、さつきの人が出て來ました。私はこゝだにらみつけてゐましたが、その人は私の方をふりむきもしないで、一しようにんめいに走つて、どこかへいつてしまひました。私はあとでかんがへてみましたが、どつもへんだとおもひました。そのあくるばんのことでした。ゆふべの人がうしろ手にしぼられて、白い光るものをつけた、やうふくの人につれられて、またそのみちをとほりました。私は、それがまたふしぎでなりませんでした。(尋二女)

尋常三年から四年にかけては、此の態度は更に一段の發展を遂げ、兒童の之に對する興味も殆んど白熱點にまで到達するやうに思はれます。一方兒童の科學的觀察の態度もだん／＼芽がのびて來ますので、彼等の表現は著しく其の質と量とを増して來るやうであります。一つ之に伴はない感じがするのは、彼等の論理思考の力の不足であります。それに此の學年あたりの子供の——特にかうした擬人の態度をとつて創作する場合に於きましては、その大部分が一瀉千里に想像聯想の趨くまゝに表現の筆を走らせて行くのでありますから、考へ／＼思想を練つて之を表現してゆく説明の文章などは違つて、ともすれば文章の中に知的破綻を生ずるやうなことが多くなるのであります。例へば、

私は私のうちの柱時計です。私が朝五へん打つと、私のお母さんが起きて御飯をたきます。それから私は御飯をたべて學校へ行きます。

これなどは、極端な論理の破綻で、こんなひどい誤りは少いでせうが、次のやうなになると、さらにあります。

私にきりめしてす

私は今竹のかはの中に包まれてゐます。私がまだお米のじぶん米びつの中にぐう／＼ねてゐますと、ふいにかき出されておけの中に入れられました。どこへつれてゆかれるのだらうとおもつてゐますと、その中にゐどのそばにつれて行かれて、あたまからつめたいつめたい水をさあ／＼とかけられて、やたらにかきまぜられました。

すこしすると、何だか大きなほら穴のやうな物の中へ打ち込まれました。はてどこだらうと、あたりを見まはしましたが、まつくらやみで何が何だかすつかりわかりません。しばらくすると下の方からあつ／＼といふなかまのなきごえがきこえます。その中に私のおしりもだん／＼あつくなくてきて、ちやうどかじにでもあつたやうな心もちがしました。それからといふものは、なかまのものが大さわぎをはじめ、私もあつくてたまりませんので、一しよにさわいでゐるうちに、いつかからだかふくれ出しまし

た。これはふしぎと思つてゐるうちに、明るい所に出されました。あゝいのちがたすかつたとよろこんでゐると、又私どもをこんどは棒みたやうな物が五本ならんで中にひらたい所のある、ふしぎな形をしたものが二つ出て来て、りやう方から打ちかためられました。それからたけのかはの中に入れられて白いきれで包まれました。少したつと、黒いやうふくをきた、かはいらしいぼつちやんが来て、私をかたにかついでゑんそくに行かれました。おひる頃になると、「ずどん」と大きな大砲の音がしたので、「あつ」と耳をおさへて目をとぢてゐるうちに、「いづかぼつちやんの口の中にはいつてゐました。」友納氏綴方教授法所載)

この文章などは、全體の着想から見ても甚だ面白いのでありますが、たゞ前後の書き出しと結びとを對照してみると、そこに時間の上の矛盾を感じないわけには行きません。これは矢張り知的不用意！或は反省推敲の不足から生れた一種の缺陷であると思ひます。

次にこれも矢張り知的缺陷として數ふべきものゝ中にこんなのがあります。漢は米である。僕のお母さんはいねと言つてゐなかのたんぼの中にそだつた。お母さんの生れたのは今年の正月頃であつた。はじめはたゞ青いかみの毛が二本ばかり生えてゐたのであるが、やがて大きくなるにつれて、かみの毛もふえた。夏のはじめになつてさみだれの頃になると、お母さんは二三人のなかまど、外のたんぼへなほされた、それからまもなく大きくなつて、秋になると花がさいて實がたくさんなつた。漢はその實の中から出たのである。(某校兒童作)

この文章が有つところの缺陷は、稻に對する知識經驗の不足から生れた一種の知的破綻であります。尤も之を更に一步進んで考へると、自分の經驗界に十分這入つてゐないところの題材を捉へて之を表現しようと試みた其の創作の態度に、根本的の過ち——心得違ひがあると思ひます。尋常三四年頃の子供は、とかく奔放な想像の世界に飛込むことを好む結果としまして、得てかうした不

熟な題材を捉へて無理やりに之を纏めようと試み、遂に知らず／＼いゝ加減なごまかしやウソを書くやうになるかと思はれます。かうなると綴り方はもはや生活生命の表現を離れて、拵へた空想の表現に陥つてしまふのであります。綴り方の題材はすべて之を自分の生活圏内に求めなければならぬ。自分の経験以外の材料を持つて來ることは、自ら大なる危険を誘致する因であることを、此の時代の子供には特に深く脳裡に印せしめておく必要があると思ひます。此之を要するに、此の種の文章に於て、最も大切な根柢をなすものは、作者の題材に對する徹底的な觀察と、之に伴ふ主觀の燃焼であると思ひます。作者の觀察眼が鈍り、作者の主觀が其の光と熱とを失ふ時、——換言すれば、作者が題材に對して十分な理解と生命の投入を遂げ得ない時、擬人の文章は遂に一個の偶像——しかも甚だまづい偶像に終つてしまふかと思ひます。故に教師はそこらの點に十分力癪を入れて、子供の創作に深い暗示を與へるやうにしたいものだと思ふのであります。

自己描寫は前にも述べた通り、作者自身が自己の生活を凝視し、経験を反省して藝術的觀照を試み、之をあるがまゝに描き出す行き方で、尋常一二年に於て早くも其の歩みをはじめるのであります。

ボク ノ スキナ ギイス

ボク ハ マイニチ ノハラ ニ ユキマス。ソシテ ギイスヲ トツテ
 アソビマス。ソシテ カヘルトキ ニハ、スグ ノハラヘ ニガシ
 テ マリマス。ソレデ ボク ガ ノハラヘ イクト、スグニ ギイス
 ガ デテキマス。ギイスニこぼろぎ。(一年男)

ツ リ

ボク ハ ツリガ スキデ、イツモ ニイサン ト ツリニ イキ
 マス。ニイサンニ エサヲ ツケテ モラツテ、ドボン ト ナゲコ
 ム ト、サカナガ キテ、スグニ エサヲ トツテ ニゲマス。マ

タ ッケテ モラツテ、ドボン ト ナゲコム ト、マタ エサ ヲ ト
 ラレテ シマイマス。ソレデ ナカナカ サカナ ハ ツレマセン。タマ
 ニ、小サイ サカナ ガ、ツレル コト ガ アリマス。ニイサン ハ
 ボク ヨリ ツルノガ ジヤウズ デス、トキドキ、大キナ ハゼ ヤ、
 チヌ ヲ ツリマス。(一年男)

貝ヒロヒ

ヤウフク ノ ヅボン ヲ マクツテ、貝 ヲ トリハジメマシタ。ヤハ
 ラカ ナ スナ ヲ 手 デ カキワケル ト、中カラ 貝 ガ デテキ
 マス。シカシ、ハジメ ハ ミンナ 小サイ ノ バカリ デシタカラ
 ステマシタ。ソノトキ センセイ ガ キテ、大キナ 貝 ヲ クダサイ
 マシタ。

ソレカラ、又 バシヨ ヲ カヘテ トリ ハジメマシタ。コンド ハ
 大キナ 貝 ガ タクサン 出テ キマシタ。ハンカチ デ 一パイ ト

リマシタ。

ウチヘ カハツタトキ、「タダイマ。」ト イフ カハリニ、「オミヤゲ ヲ
 トツテ カヘリマシタ。」ト イヒマシタ。(二年男)

この種の行き方では、何といつても生活の観照が第一に先き立たなくては駄
 目でありませぬ。指導の要點はかゝつて其の一事にあるのであります。

次に自己観照の結果を、純客觀的に、例へば自畫像を畫くやうな心持で描く
 こと——さうした行き方は、尋常五年から六年にかけて指導するのが一番適當
 なやうであります。次に其の一二例をあげてみたいと思ひます。

零 點

彼は隣の者から自分の答案を受取つた。彼は手早くその紙をひろげてお終
 ひの方を見た。そこにはいつになく〇と大きく記されてあつた。彼はそれ
 を見るなりハツとして氣が遠くなつたやうな心持がした。そのまゝ紙をつ
 かねで廊下に出た。そして、彼は廊下の窓にからだをもたせながら一人で

つぶやいた。

「しまったのう、これで大分平均點が下つた。」彼はかうつぶやいたと思ふと、いきなり手に持つてゐた答案の紙をビリ／＼と引き裂いた。彼の顔には硬ばつた筋がピクリと動いて、眼が異様に輝いた。彼は紙をすた／＼に引裂いてしまふと、それを窓から下へ向けてなげた。紙はひら／＼とまひながら落ちて行つた。彼は其れをじつて見つめてゐたが、紙が桑の葉の間から地上に舞ひ落ちたのを見届けると、「今度はよい點をとつてやるぞ。」彼は又かう言つてつぶやいた。彼の口元には決心の色があり／＼と浮んでゐた。(尋六男)

白百合

彼女は机にもたれて暗い庭をながめた。庭はまつ暗で、闇い隅に魔ものがひそんでゐる様な氣がする。どこからかぶんとよい香がして來た。彼女ははつとして机の上を見た。机の上にはさつき取つたばかりの白百合の花が、

露を含んだまゝ花瓶に挿されて、頸をうなだれて居た。彼女は白百合の花の所へ鼻をもつて行つて香をかいだ。甘いやうなうつとりとなるやうな、いゝ香がぶんと彼女の鼻をついた。眞白な百合の花、お姫様のやうだ、彼女はさう思ふとにっこり微笑んだ。となりの家から笛の音がかなしさうに聞えて來た。彼女は笛の音に引きつけられるやうに、縁側に出た。涼しい風が彼女の髪を吹いた。空には星がキラ／＼と輝いてゐた。笛の音がベッタリやんだので、彼女は又部屋にはいつた。彼女のノートの上には黄色い水が一滴落ちてゐた。よく見ると、それは花の雫であつた。どこから來たのであらう、蜂が一匹、白百合の花の筒の中にはいつた。彼女がそつと覗いてみてゐると、やがてぶーんとうなつて、暗い庭の方へ飛んで行つた。

(尋六女)

まちこがれた汽車

彼女が廣島驛に着いた時には、もう次の下りの汽車の發車までには十五六

分位しかなかつた。切符を切つて貰つて、プラットホームに出た時、彼女には下りの汽車の來るのが、どんなに待ち遠しく思はれたことであらう。彼女の胸の中には、彼女の姉の姿がはつきり描かれてゐた。懐しい姉に飛びついてゆく彼女自身の姿までが、まざ／＼と目の前に見えた。彼女はかうして非常な喜びを胸一ぱいにたゞえながら、首を長くして下りの汽車の來るのを今か／＼と待つてゐた。その時突然彼女の耳を驚かしたのは、ちりん／＼とけたゞましく鳴るベルの音であつた。あれが鳴ればもうすぐ來るのだ、彼女はかう思ふと、もうたまらなく嬉しくなつて胸悸の高まるのを自分からはつきりと感するのであつた。やがて彼女の待ちに待つた汽車は來た。彼女は胸を躍らせながら、一々列車の中を見のがさないやうに覗き込んだ。しかし、彼女の待ちに待つた。懐かしい姉の姿は、とう／＼そこには見つからなかつた。彼女の胸はいつしか嬉しさが悲しさに變つて、彼女の眼には熱い涙が一ぱいたまつてゐるのであつた。(連六女)

此の種の行き方を子供にやらせまして、第一に感じますことは、やはり子供の「自己觀照」の不十分といふことであります。何と言つても此の種の文章で最も大切なのはこれであり、尤も「自己の生活を靜かに觀照する」といふことは、敢て此の種の態度の表現に必要なばかりでなく、あらゆる藝術的文章の基礎をなすものだと思ひますが、此の種の行き方に於ては更に一層その必要感を深くするのであります。——子供は、自己の生活觀照が不十分である結果としまして、やゝもすれば單なる事件の筋書をなすに止まり、或は單なる事物の羅列に終る場合が少くありません。かくの如くにして彼等の描寫は、彼の自然主義初期の作品のその如く、極めて外面的な平面的な奥行のないものになつてしまふのであります。此の意味からして、私は子供に此の種の表現を試みさせるには少くとも尋常五年乃至六年以上の子供を以て、最も適當なる始期と思つて居ります。私の經驗から申しますと、私はその中でも尋常五年に試みた分は大部分失敗に終つてしまひました。——その原因を考へてみまする

に、そこには尙ほ次に述べるやうな表現の際の不注意に基づく缺陷も多く手傳つてゐると思ひますが、——即ち

第二に感ずるのは、表現上から見ても態度の混亂——即ち論理の破綻に陥り易いことでもあります。これは従來の考へでゆくと、單なる「技巧」の上の失敗として數ふべきものでありませうが、しかしその根柢として矢張り觀點から出發した態度の不徹底といふことが因になつてゐると思ひます。

學校から歸つて來たMさんは、かばんを机の上に置くと、いつもの通り庭へ飛び下りて、バケツに水を汲んで來た。そして植木棚の鉢に片つ端しか
ら水をやつた。その時お父さんが銀行からお歸りになつたが、お父さんも亦庭に下りておいでになつた。そして此の鉢をあそこへ移せ、あの鉢をこゝへ持つて來いと指圖をされる。一々その通りにやると、やがてお父さんは座敷へあがつて煙草をのんで居られる。僕も足を洗つて上へあがつた。そして自分の部屋へ行つて、讀本の復習をしはじめた。今まではだして働

いたせいか、氣持がよく、書いてあることがすん／＼頭に入るやうだ。

この文章は態度の混亂した一例であります。即ちMさんなる作者は、自分の行動乃至心持を客觀的に觀照した所に此の種の行き方の特色があるのでありますから、表現に際してもあくまで此の態度で始終一貫するやうにしなければならぬ譯であります。然るに此の文章では初めの書き出しのあたりは申分ないのでありますが、後段になつて「僕も云々」と出て來ましたので、そこに態度の混亂を生じたのであります。尤も此の論理上の破綻は、もそつと前の方の「その時お父さんが銀行からお歸りになつたが云々」といふ箇所に於て、己にその危険が豫示されてゐるやうに思ひますが、しかしそれは、後の方の結びやうでどうでもなる譯であります。要するにこゝでは「僕も云々」が最大の失敗をなして居ります。次に最後の一句が、これまた同じ種類の失敗に陥つてゐるやうに思はれます。かうした態度の混亂は總じて子供の論理的規範が十分に働かない所に遠く其の源を發してゐるのでありますから、尋五以上の子供でな

ければ此の種の態度の表現が不適切だといふことは此の意味からも十分に立證されるところと思ひます。

第九 綴り方に於ける説明乃至評論の指導

一 説明の文章と其の指導

説明の意義及び特質——綴り方に於ける説明の指導

描寫が藝術的表現の本道であるとするならば、説明はまさに科學的表現の本道と言ふべきでありませう。しかも、此の二つは互に相分ち、相交はり、相倚り、相援けて以て、生活表現の使命を完うするのであります。

藝術の生命は具象に即して表現さるゝものであるが故に、藝術的表現の本道である描寫の特質は第一に具體的といふことであります。今同じやうな形式で説明の特質を考へて見るならば、それは概念的乃至抽象的と申すことが出来

ようかと思ひます。何となれば、本來科學の生命とも言ふべきものは、具體そのものにあるのではなくて、具體の概念化、乃至抽象化にあるからであります。説明は實に具體の概念化、抽象化に即する表現の手法であり、之が心的過程を物語るものに外ならないのであります。

しかしながら、更に一步進んで考へると、科學の使命は單なる具體の概念化乃至抽象化によつて完全に果たされたものとは申されません。むしろ是等は一種の手段乃至は過程に過ぎないのであります。その目標は是等を統一する法則乃至真理の發見にあるのであります。随つて之が生活表現の本道である説明の手法も亦、當然眞理法則の發見への道行きであらねばならぬと思ふのであります。かくて、描寫が深く美しき藝術の世界を形造るその如く、説明は深く正しき科學の世界を形造るのであります。

綴り方に於ける説明の指導は、兒童の精神生活に科學的な芽生えが成長しは

じめるのを待つてはじめるがよいと思ひます。而かもさうした芽生えは、彼等の藝術的な生活の内部から徐々に發展して來るのでありまして、さうした色調は尋一の綴り方にも十分之を認めることが出來ます。例へば

ボクノウチノヒト

ボクノウチニハ、オトウサンガキマス。オカアサンモニイサンモキマス。ニイサンハフタリキマス。

オトウサンハ、ガクカウノセンセイデス。オカアサンハ、ウチデゴハンヲタキマス。マタシヤミセンノオケイコニイキ

マス。大キイニイサンハ、チュウガクカウニイキマス。小サイニイサンハ、ボクト一シヨニセウガクカウニイキマス。(一年男)

ダンス

ボクノウチニハダンスガアリマス。ダンスノ中ニハ、キモノガハイツテキマス。オカネハ一ツモハイツテキマセ

これ等は皆自由作の中に現はれたもので、特に指導したものではありませんが、彼等の聯想を追ふ記述の裡から、自然に説明の態度が芽ぐんで來たのであります。

ン。ヨソデハダンスヘオカネヲイレルトコロガアリマス。ガ、ウチデハイレマセン。オカネハオトウサントオカアサンガ、サイフノ中ニイレテキマス。
ウチノダンスハアタラシイノデスガ、ソレデモキズガ一パイツイテキマス。
ウチノエイチヤンハ、イツデモダンスラアケテ、オカアサンニシカラレマス。(二年男)

ところが、尋常三四年頃になつて、兒童が物の客觀的な觀方を盛んに試みるやうになると、之が表現の上にも著しくさうした色調が現はれてまゐりまして、兒童の聯想がひとりで論理の過程をふむやうになります。所謂「説明」の文

章は、此の頃が最も指導の好時期であると思ふのであります。私は嘗て尋常四年の男の子供に、自分の所有物又は自分の家にある品物の中から材料を選んで、之を他人によく分るやうに説明せよと命じたことがあります。所謂廣い意味の課題であります。次にその成績を一二お目にかけてたいと思ひます

ひやうたん

僕のうちには大小十一個のひやうたんがある。みんな、お父さんがすきで方々へ行つて集めて來られたのである。

一番大きなのは長びやうたんで、長さが二尺二三寸もあらうか。これはすわりがわるいから、いつも紐でくくつて居間の天井にぶらさけてある。一番小さいのはあたり前のひやうたんがたで、よくすわる。高さは五寸ぐらゐりしかないが、つやが大そうよいといふので、お父さんの一番お気に入りだ。その外のは形も大きさも色々であるが、みんな一しよに紐でくくつて

天井のすみつこにぶらさけてある。一番小さい分だけは、いつも火鉢の横の茶ダンスの上においてある。そしてひまさへあれば、お父さんはいつでも酒をきれにつけて、火鉢の横で一心にそれをみがいてゐらつしやる。僕が此の間「何でそんなにみがくのですか」ときいたら、「これはつや出しだよ」とおつしやつた。(四年男)

僕の寫眞

僕の小さい時の寫眞を出してみた。先づ女のやうに袖の長い着物を着て、頭の毛を長く生やしたのがある。これには生後五十七日と書いてあるが、どうしても僕とは思はれないやうな気がする。又生後八ヶ月に、ふんどし一つで相撲取のやうに太つて、目を丸くしたのもある。いかにも可愛らしい。僕が四つの時に弟が生れたので、それから後の寫眞には必ず弟が一緒に寫つてゐる。二人がえんがはへ足を投げ出して、お菓子を食べてゐるのもある。弟は口をもぐぐさせてゐる。それかと思へば、僕が盲目のあんな

まさんのやうな顔をしてをると、弟はそれをにらみつけて、下駄を一方ぬいで片手に持つて、恐ろしい風をしたのもある。いすへ腰をかけて、げら／＼笑つてゐるのや、むりに口をつぶつておこつてゐるのや、初めて學校へ行つた日に服を着て大きな靴をはいていばつてゐるのや、その外いろいろなのが澤山ある。寫眞屋で寫したのより、家で自由に寫した方がよほど面白い。これを僕達が大人になつてから見たら、どんなに面白いことだらう。(四年男)

此の種の行き方で何よりも大切なことは、やはり精緻な而かも正しい觀察であります。すべての思考——具體の概念化、抽象化、乃至は眞理法則の發見といつたやうな仕事は、悉く此の根柢の上に立つて始めて其の正しさを得、説明の文章はそこにはじめて其の基礎が築かれるのであります。

次に大切なことは、右の觀察に本づいて題材を構成し統一することであります。換言すれば論理的に題材をまとめることでもあります。これは頭腦の明晰な

作者なら何も問題はありませんが、然らざる者に於てはあらかじめ目次を造つたり、プランを立てたりすることの必要もあるかと思ひます。そこらは適宜手ぬかりなく指導を加へるがよいと思ふのであります。

二 評論の文章と其の指導

評論の意義及び特質——綴り方に於ける評論の指導

説明に自分一個の意見が加はる時、或は自分の主張を述べる時、私たちは通常之を論文又は評論文と呼んでゐます。評論とは蓋し批評と主張とを一緒にしたものであらうと思はれます。

かうした行き方は、私たちの日常生活に屢々あらはれることであり、又極めて必要なことでありまして、私たちは人を相手にして常に何等かの意見を述べ、何事かを評論して生きてゆくのであります。而して、それがやがて自己を磨く所以であり、自己の生活を進める所以であります。かうした意味に於て、所謂

評論文なるものは、私たちの生活にとつて、極めて實用的な文章であると言つてもよからうと思ふのであります。

實用的といふことは、一面から見ると功利的といふことになります。廣く考へると論理的乃至實踐的といふことにもなります。藝術的乃至科學的の生活は其の本來の目標が功利を離れた純真或は純理にあるが故に、之が表現に際しても、必ずしも讀者乃至相手を豫想する必要はないのであります。評論即ち自己の意見を述べ主張を開陳するといふことになると、そこには必然的に相手即ち讀者を豫想しなければなりません。細かに考へると、すべて相手の思想、相手の年齢、相手の趣味等によつて、説明の仕方や、意見の述べ方に考慮を加へなければならぬのであります。この點が、此の種の行き方の、他と大いに異なる所以の特色であります。

綴り方に於ける此の種の指導は、尋常五六年以後を最も適當な時期であると

思ひます。何となれば、此の時期に於て、兒童の精神生活の中にはじめて倫理的實踐的な觀方考へ方が鮮明に現はれはじめからであります。即ち此の種の行き方を、自ら好んで試みるやうな時期に到達するからであります。

私は嘗て高等科の女兒に此の種の行き方を試みたことがありました。極々廣い意味の課題で、取材は一切兒童の自由にしたのであります。次にその際の成績二三をあげることにいたします。

顔

顔は心の鏡である。悲しい時には泣き、嬉しき時にはほゝえみ、心配な時には眉をひそめ、腹立たしい時は目に角を立て、或は口をゆがめる。こんな具合に、心持の變化は直ちに顔の表面に或は形となり、或は色となつて現はれて来る。自分ではつとめて顔に出すまいと思つてゐても、それは駄目で、他人から見れば一目して心の奥まで見透かされるのである。これは一寸した喜怒哀樂が顔にあらはれることを言つたのであるが、さて

此の心持がいつもくりかへされて習慣になると、顔の形や色もそれに従つて自然にきまつてしまふ。いつも心配ごとのある人の顔は始終曇つて見えるし、樂天家の顔はいつもにこにこである。他人のものを盗むくせのある子供が目つきのわるいのや、怒りぐせのある人がいつも目の上に皺を寄せ、口をへの字に結んでゐるのも、これが何よりの證據である。生れつき如何に美人であつても、心が墨のやうに黒くなつたら、美しさを誇つた顔にも、いつしか黒い影をあらはすであらう。又之と反對に、生れつきはさう美人でなくとも、心中の雪よりも清らかなものであつたら、顔の形は根本的にかはらぬまでも、何處となく愛嬌のある顔となるであらう。世の中には生れつき綺麗でないといつて、随分身をはかなむ者が多いが、若し美しい顔の持主になりたいなら、先づ心の修養に力をつくさなければならぬ。心から美しい者は白粉などの助を受けなくとも、自ら美人となることが出来るであらう、(高一女)

人の寝顔

人の寝顔ほど清く麗はしいものはない。ふだんあまりに性質のよくないと思はれる人でも、寝顔にこそは實に神や佛の尊さが宿つてゐるやうに思はれる。

けんくわばかりしてゐる憎らしい妹でも、すやくと眠つてゐる時、その寝顔を見るとたまらなく可愛くなつて來ることがある。お多福のやうな廣子も、寝てゐる時の顔はほんとに愛らしい。時々、夜遅く起きてゐる時などは、すやくと寝てゐるゆかしい皆の寝顔を見て、私のやうな者でも、眠つてゐる時は善人のやうに見えるのか知らと思ふことがある。(高二女)

兄弟

兄弟は両手の如しとはよく聞く諺である。が、小さい時にはなか／＼さう人のいふ様に仲よくは出來にくいものである。

私の弟は大の／＼意地悪で、その上筋の立たない理窟をよくこねまはすので、私とよく言ひ争ひをすることがある。其の時にはお母さんは、いつも弟びいきで、「大きい者が悪い」といつては私を叱られる。其の當座、私は弟がたまらなく憎いものに思はれて、弟が居なかつたらと思ふことが度々ある。けれども少し時間がたつと、其の憎しみは何時の間にか消え失せて「今泣いた鳥がもう笑つた」と言はれるやうに仲よく話をする。考へてみると可笑しくもなるが、これが即ち兄弟の兄弟たる所以であらうか。

姉さんと私とは、よく面白いことや可笑しいことやを言ひ合つて、時に議論のやうになるにがある。いつかつまらぬことから例の通りそれをやつて、どちらも負けず劣らず大分大聲で論じ合つた。しまびにはとう／＼

「あんたが妹に生れて來たのだから仕様がなないじやないネ」

「それでもお母さんが妹に産んで下さつたのだから仕方がなないじやないネ」

「それなら自分で妹に生れて來なければいゝじやないネ」

「でも赤子の時に分るものネ。さういふ姉さんこそ自分が妹に生れて來ればいゝ。」

こんな譯の分らぬ問答になつてしまつた。いつまで言つても同じことなので、とうとうどちらも嘖き出してしまつたのであつた。これでも別にいつも憎み合つてゐるといふ譯ではなく、話の調子で妙な意地つくのからみ合ひになるのだ。

をかしたもので、面と向ひ合つてゐる時には、よく喧嘩もするが、いざ別れてみると、時にはたまらなく戀しくなつて、飛んで行きたいやうな氣になることがある。私は姉さんがよそに縁づいて行かれてから、其の心持をしみ／＼味つた。その癖、時々行つて逢つてみると、又いつもの意地が出てちよつと言ひあつて見る氣にもなる。これが矢張り兄弟たる所以であらうか。(高二女)

冬

私は小さい時から冬が好きだつた。どういふ理由で好きだつたかはわから
ないけれども、小さい時の冬を思ひ出す度に、私は炬燵にあたりながら
障子を明け放して、ぐるり／＼と大きな輪を回して降つて来る雪を眺めて
ゐたのが一番に頭に浮んで来る。その事だけは、不思議に／＼私の頭に深
く刻みつけられて居る。現在でも、冬は春夏秋のどれよりも一番好きだ。
春には春のいゝ所があるし、夏にも秋にもそれ／＼いゝ所はある。けれど
も、冬ほど淋しさ——ひとりで涙のにじみ出るやうな、しみ／＼とした
さびしさ——を味はすものはないと思ふ。秋も淋しいけれど、秋の淋しさ
は晴々とした淋しさである。清く澄んだ淋しさである。それに比べて冬の
淋しさはどうであらう。冬枯れの木に木枯の風。たゞそれだけでも、荒れ
た、思ふまゝに荒された、漠々たるさびしさである。私はかういふ風な淋
しさを味ふのが好きだ。其のさびしさを想像するだけでも深刻な詩が、心

の底から浮び上つて来るやうな気がする。

春、夏、秋の三つに比べて、冬は私にとつて一番なつかしい、思出の一番
多くふくまれてゐる時である。冬を思ふ時、私の胸はなつかしさにわくわ
くするやうだ。矢張り私は冬が一番好きだ。いつか冬の詩が作つてみたい
と思ふけれど、思ふまゝに書くことの出来ない自分を悲しんでゐる。(高二女)
最後の一篇は自由作の中から拾つたのでありますが、要するにかうした態度
の行き方は、高學年に於てはじめてやゝ充實したものが得られるやうに思はれ
るのであります。

第十 手紙及び日記についての指導

一 手紙の文章と其の指導

手紙の特色——手紙指導の機會——手紙と文話——
手紙と鑑賞材料

手紙は元來廣い意味の實用に立脚するところの文章でありまして、評論文と同じく、否むしろそれ以上に相手即ち讀者を想定して書かなければならない、そこに手紙独自の特色があると思ひます。手紙の文章が昔から所謂「書翰文」として一種特別の待遇を受け、其の中に更に數十の種目があり、一般の文章界にあつて陰然たる一大王國の觀を呈してゐたのは、全くさうした理由に基づくのであらうと思はれます。

しかしながら、前に述べたやうな手紙の特色は、むしろ人間一般の常識として心得おけばよいことで、それが故に手紙を一種特別扱ひにして、一般の文章から全く引き離して考へるには當らないと思ひます。

特に、昔の手紙と言へば先づ前文、本文、末文の三部より成るといふ一つの型を示し、此の型に合わせて手紙を書き習はせたものでありますが、これは恰かも小笠原式の禮法を一般に傳習せしめるやうなもので、或る特別な場合を除くの外、全く實生活に出て來ないやうなことを念入りに稽古させてゐたのであり

ます。例へば實生活に於て最も多く手紙を往復するやうな親しい友人間の場合には、むしろくだくしい前文、即ち四角張つた時候の挨拶なんか一切ぬきにして、端的に用件を書き送つた方がどれだけお互ひに親しみを感ずるか分りません。彼の有名な「一筆啓上火の用心、お三泣かすな馬肥やせ」の名文は、夫から妻にあてた手紙であります。蓋しそこらの消息を最も雄辯に物語るもので、まことに意味深長、餘韻嫻々の趣があると思ひます。又彼の俳聖芭蕉が、門人杉風及び其の母堂にあてた次の手紙の如きも、同じやうな意味に於て、まことに面白い、且つ詩味情味ゆたかな書きぶりであると思ひます。

枕屏風むだ書き致し、即ち御使へ相渡し申候。襦袢せんたく糊少々と御申付可被下候。以上。

杉風様

おふくろ様

口上にかき落しけり土大根

はせを

以上の立場に立つて考へると、相手を假定して書かせるところの手紙、即ち假作による手紙は、あまりに價値の多いものとは思はれません。むしろ、手紙を出すべき必要が起つた時に之を書くといふ風に仕向けることが、却つていゝと思ひます。

そこで、兒童に手紙を書かせること、及び之に即する指導を方法的に考へてみると、そこには二つの道が考へられます。その一つは自由作の中に現はれる手紙であり、今一つは兒童に手紙を書かせるやうな機会をつくつてやることであると思ひます。其の後者については、私は次のやうな場合を考へて豫定してゐます。

1、病氣その他で缺席してゐる子供に見舞その他の手紙を書かせる、此の場合には、その手紙をまとめて、或は各自に病氣その他で休んで居る當の本人へ届けてやるのでありますが、病氣が長引いた時などには、病人からも

御禮の返書をやる、かくて二三次手紙の往復の行はれることもあります。

2、父兄が轉住した爲に、それに従つて東京なり京都なりに轉學した子供に向つて、時折り手紙を書かせます。此の場合にも其の手紙は向ふへ送つてやるので、前同様手紙の往復が出来ます。

3、夏と冬の休暇には、教師と子供、子供と子供との間でお互に通信をします。私は休み中の大部分を旅行に費すので、旅行先から子供にゑはがき通信をすることを毎年のつとめにしてゐるのでありますが、私の旅行先が前以て明瞭になつてゐて、滞在日数の二三日以上に亘る場合には、子供に豫告しておく、子供から葉書なり手紙なりが來て居ることもあります。これ等は強請しては面白くありませんが、お互の自然の發意による場合には甚だ嬉しいものであります。

尙ほ、地方では次のやうなことも面白いと思つてゐます。

1、學校と學校とが相談して、子供同志に手紙の交換をさせる、此の際、其

の前に一方の學校から相手方の學校へ其の兒童を引きつれて出かけ、テニスでも一緒にやらせて親しませておいたら更に妙だと思ひます。

2、兒童雜誌を學級文庫にでも購入する際など、直接東京の出版元へ子供に注文させてみる。自分たちの手紙が先方へ届いて、先方から品物が來たり、返事が到來したりした喜びは、彼等にとつて蓋し◎印の評価以上の喜びに相違ないと思ひます。

手紙に於て假作がさほどの價值を齎さぬとすれば、之が指導については右の様な機會を造つてやる外に、時々文話を試みて之が間接的な培ひをしてやることも大切なことだと思ひます。特に尋常五六年あたりでは、前にも述べた通り實踐的生活が著しく現はれる時期でありますから、此の時期に於ては幾分組織的な手紙の指導を行ふことも必要になつて参りませう。それ等は多く文話によつてやるのが一番いゝと思ひます。次にあげるのは、私が嘗て尋常六年の兒童

に試みた實際の一例であります。

話題「手紙を書くについて大切なこと」

昔の人の言葉に「手紙上手は一生の徳といふことがあります。これは誠に面白い、そして又よく實際を穿つた言葉であると思ひます。實際世の中には、手紙が上手であるために、萬事都合よくトン／＼拍子に成功する人が少くありません。又之と反對に手紙がまづいたために、始終損な目にばかりあつてゐる人も少くありません。それは何故でせう。考へてみると別に不思議でも何でもありません。わけはかうです。

手紙といふものは言ふまでもなく自分の考へてゐることを相手に知らせるために書くものでありますから、言ひ換へれば人と相對して語るのと全く同一であります。つまり手紙とは、人と相對して語るかはりに——（それは相手が遠方に居るとか、或は自分が忙がしい仕事にかゝつてゐるとか言ふ理由のために、直接面會して語ることが出来ないから）——その語らう

と思ふことを文章に書きついで、之を語らうと思ふ相手の人に送ること
であります。ところが人は言葉の使ひやうで、同じ意味のことを言ふにも
或は角が立つて相手の氣嫌を損じたり、或は圓く穩やかに親しみがあつて
相手を喜ばせたりします。手紙でも全く之と同様で、その書きやうによつ
ては、或は相手を怒らせ、或は相手を喜ばせます。人を怒らせることが、
結局自分の損になることや、人を喜ばせることが、結局自分のためになる
ことは、私が茲に言ふまでもありません。又、人はその言葉使ひの上品
とか下品とかによつて、その人格の上品であるか下品であるか分るもの
であります。手紙の文句も矢張り同様で、その書きぶりによつて、其の手
紙を出した人の上品か下品かはすぐに分ります。上品な人が多くの人に尊
敬せられ信用せられることも亦、もはや説明しなくても明らかなことだと
思ひます。それから又、人は其の話しぶりを聞いて、其の言葉使ひがハキ
／＼してゐて、言ふことにムダがなく、筋道の通つた話しをするといふや

うな人であると、その人がきつと頭のよい、物事にしつかりした人である
ことを思はせます。頭のハキ／＼した人、物事をしつかりやる人が成功す
ることは、また私が茲に言ふまでもなく、たしかなことでもあります。手紙
を見ると、その書きぶりによつて、その人の話を聞くと同様に、矢張りそ
の人の頭や才能などがよく分るものであります。——かう言つたら、もは
や手紙の文章の大切なこと、即ち、人間は一生の世渡りをするに就いて、
先づなるべく手紙を上手にかくやうに工夫しなければならぬことの理由
が、十分に解つたことと思ひます。そこで私は、どうしたら手紙が上手に
書けるかといふことに就いて、最も大切な二三の注意をのべたいと思ひま
す。

手紙を書くに就いて第一に大切なことは、前にも言つた通り、相手を目の
前に置いて、本當に其の人とお話をする心持で書くといふことあります。
で、手紙をやる相手が目上であつたら、目上の人とお話しをするやうに、

相手を尊んだ丁寧な言葉をつかひ、相手が親しい友達であつたら、親しい友達に語るやうな書きぶりをするといふやうな工夫は、そこから自然に生れて來ると思ひます。時候の挨拶なども、久しく逢はない人や、はじめて手紙をやる他人行儀な方へは是非必要でありませうが、朝晩逢ふ人や、お互に氣兼ねのない友達などには、必要のないことでもあります。しかし、これも相手を目の前に想像して、本當に其の人と話す心持で書きさへすれば、決して間違ひつこはない筈であります。

第二に大切なことは、その手紙を何のためにやるのであるか——つまり手紙の用向きを十分に考へておいて、その用向に合ふやうに書きぶりを工夫することでありませう。例へば親類の人や友達や先生など親しい人に出す時候伺ひの手紙や、お見舞の手紙や、お祝ひの手紙や、報知の手紙などは、十分に自分の心持が出るやうに、所謂「親しみある手紙」を書かねばならないのでありますが、商店に品物を注文する手紙や、會社へ或る事柄を問

合する手紙や公の用向で或る知人へ通知する手紙などは、其の用向を通ずるに就いて、萬事手落のないやうに、又よく先方に意味の分るやうに、はき／＼して氣の利いた文章を書かなければいけません。

第三に大切なことは文字の書き方でありませう。これはどこまでも丁寧に、正しく、眞面目に書く稽古をしなければいけません。世の中には、少しばかり草書を知つてゐたり、變體假名を知つてゐたりすると、すぐ之を手紙に使ひたがる人がありますが、これは誠につまらぬ自慢であります。尙手紙の書き方には通常一定の作法がありますから、これも目上の人などにやる手紙では、それ／＼の作法をまちがへぬやうにすることが大切でせう。たとへば、巻紙では書き初めに二寸或は三寸の空白を残しておくこと。一番終りの宛名を書いた後も同様のこと。天地を相當にあけて（上をせまく、下を廣く）書くことなど其の一例であります。

併し、今日では一般に西洋紙にペンで書く場合が多いやうですから、そん

な場合に右の作法を堅苦しくかつぎ出す必要は決してありません。要は矢張り時と場合を考へて、適當に所置することでありませぬ。

以上は手紙を書くに就いて、最も大切な注意の二三をあげたのでありますが、今度はそこに配つてある五六種の手紙について、今私が話した事を考へながら十分熟讀をしてみして下さい。——(文例は略します)——

多くの鑑賞材料——即ち古人今人の實際の手紙——を多く讀み味はせるといふことも、亦たしかに有効な指導の一つであると思ひます。次に其の四五例をあげたいと思ひます。

□
風邪にやられたのは僕ばかりかと、此の間中悲觀してゐたら、君もとうとう參つたか。同病者が出來て僕もいさゝか心強く思つたよ。怒るな、君！

これからは全快の競争だ。勝つた方が蕎麥をおごるのだよ。いゝか、君、しつかりたのむぜ！

これは感冒を病んでゐる友への見舞状であります。此の文面によると、當人も同じく感冒にかゝつて居ると見えます。一讀して二人の間の親しさが想像されるではありませんか。親しい友達への、かうした場合の手紙には、改まつた挨拶の前文句など一切不要であります。あたまから皮肉をあびせかけて戦を挑んだところに、却つて無邪氣な滑稽味を通して、眞の友情が溢れてゐると思ひます。

□
僕はもうだめになつてしまつた。毎日わけもなく號泣してゐるやうな次第だ。それだから新聞雑誌へも少しも書かぬ。手紙は一切廢止、それだから御無沙汰してすまぬ。今夜はふと思ひついて特別に手紙を書く。いつかよこしてくれた君の手紙は非常に面白かつた。近來僕を喜ばせたも

の、随一だ。僕が昔から西洋を見たがつて居たのは君も知つて居るだらう。それが病人になつてしまつたのだから、残念でたまらないのだが、君の手紙を見て、西洋へ往つたやうな氣になつて愉快でたまらぬ。若し書けるなら、僕の目のあいて居る内に今一便よこしてくれぬか。(無理な註文だが) 繪はがきも隨に受取つた。倫敦の燒芋の味はどんなだか聞きたい。不折は今巴里に居てコーランの處へ通つて居るさうぢやないか。君に逢うたら、鯉節一本贈るなどいつて居たが、もうそんなものは食つて了つてあるまい。虚子は男子を擧げた。僕が年尾とつけてやつた。鍊卿死に、非風死に、皆僕より先に死んで了つた。僕は迎も君に再會することは出来ぬと思ふ。萬一出来たとしても、其時は話も出来なくなつて居るだらう。實は僕は生きて居るのが苦しいのだ。僕の日記には「古白曰來」の四字が特書してある處がある。

書きたいことが多いが苦しいから許してくれ給へ。

これは明治の大俳人正岡子規氏が、三十四年の十一月に病氣(肺病)がいよ／＼重くなつて、とても駄目だとあきらめがついてから、苦しい中に自ら筆を執つて、當時英吉利の倫敦に留學中の友人夏目漱石氏へ宛て、出した手紙であります。聞くところによれば、夏目漱石氏は、向ふで此の手紙を受取つたが、あまりの悲しさに返事を書くことが出来なかつたさうであります。所謂命がけの文章といふのは、正しくこんな文章を言ふのであります。十分に讀み味はしたいものであります。

手紙の文中、鍊卿、非風とあるのは共に子規氏の友人で、氏より早く死にました。又終りの方に「古白曰來」とある古白も亦子規氏同郷の俳友で、姓を藤野名を潔といつた人ですが、明治二十七年四月十二日子規に先だつて東京で病歿しました。「古白曰來」は、古白が冥土から子規に早く來いと招いてゐるやうな氣がするといふ意味でせう。

あれからずつと福永君のところへ談しこんでしまつて、又ゆふめしのご馳走になつて、十時半頃になつてから一里の夜道をぶら／＼旅館へ歸つて来た。電燈はない、ランプだよ。若山君や福永君の生活法を視察するに至極簡便にやれ相だよ。今朝部屋を捜したよ、八疊に六疊二間つゞきで、一寸いゝ家だ、その家はシヨの煮干しをやる家で、が決して臭くも汚くもない。大變いそがし相だつたから、又夕方行つてみる事にしてあるんだが、三圓くらゐで貸してくれ相だよ。とにかくやつて来る事にして置き給へ。いづれ又。

六月五日朝（大正五年）

相州三浦郡南下漁浦徳方

泰

三

秋庭 俊彦様

これは詩人相馬泰三氏が友人秋庭篁村氏へ送つた手紙で、内容は言ふまでも

なく避暑地の家さがしの通知であります。文中福永君とあるのは歌人福永挽歌氏、若山君とあるのは同じく歌人若山牧水氏で、共に相州南下浦の漁家の一室を借りて自炊してゐたのであります。

君が来るかと思つて待つてゐたが、来ないので少し失望した、少しだよ。今力餅をくひながら小説をかいてる、鎌倉権五郎のエネルギーを借りようと思つて。

十二月二十日朝（大正五年）

龍

久米正雄様

風を引いてよわつた。少しなほつた時引越しの時しまつて見えなくなつた脇差や木刀が出たので、シャツ一枚でそれを持つて、獨りで立廻りをやつた所が又風をひいて咽をわるくしてしまつた。その爲めアラビアンナイツ

の翻譯が出来さうもない。僕の代に君が引うけてくれないか、熱が沁つて
ねてる。

十三日

芥川生

久米正雄様

これは芥川龍之介氏が久米正雄氏にあてて送つたものでありますが、親しい
兩氏の間柄がよく見えてゐて、面白い手紙だと思ひます。

二 日記の文章と其の指導

日記の特色——綴り方に於ける日記の指導

日記は生活の覚え書きで、元來は他人に見せるべき性質のものでないのであ
りますが、しかしそこには日記特有の記載法があるために、之を一つの形式と
して文藝上の創作に應用する人も少くないやうであります。

日記の特色として第一に數ふべきは、一日分一日分づゝ一つのまとまりをつ

けてゆくことであります。そこで例へば「茶摘日記」とか「稻刈日記」とか言
つたやうな特殊なものでは、全體として大きなまとまりがある上に、その中
どこか一日分を選び出して読んでみても、やはりそこに一つのまとまりがある、
といふやうな具合に、文章としては餘程自由な、入り易いものであると思ひま
す。

特色の第二にあげたいのは、文の簡潔を尙ふといふことであります。之を藝
術的方面から見れば、具體の單純化がよく行はれて、日々の經驗の中から特殊
な具象が選ばれることであり、之を實用的な方面から見ると、その日／＼の重
要な事件を掴み上げて記録にとゞめることであります。

かうした點が、小説家などのとつて以て此れが形式を小説に利用せんとする
ねらひどころになるのであらうと思ひます。

綴り方に於ける日記のつけ方は、尋常三年で國語讀本卷五に出てゐる「松太

郎の日記」若しくは小學讀本卷六に出てゐる「太郎の日記」を取扱つた後に、これを機會に子供めい／＼が之を試みるやうに仕向け、その後は時期を見て時々之が指導を行ふやうにしたらと思ひます。次にさうして書いた子供の一例をあげておきたいと思ひます。

□ (尋 三 男)

四月二十五日 金曜 晴

今日から日記をつけることにしました。ゆふがた、べんきやうがすんで、あすのよういに、鉛筆をけづらうとしたら、小刀がすべつて、左の手の小ゆびのあたまをすこし切りました。そこで姉さんからほうたいをしてもらひました。

四月二十六日 土曜 晴

何もありませんでした。

四月二十七日 日曜 晴

朝うちの前でけんくわがあるといふので、はしつて行つてみたら、もうすんでゐました。一人の男が、まけたのか、くやしさを顔をして、何かぶす／＼ひとりごとを言つてゐました。

友だちと、夜へいたいごつことをしようといつて、かみでびすとるをこしらへようとしましたができないのでやめました。

四月二十八日 月曜 晴

夜うらに色が黒くて目だけ光つたねこがゐましたので、弟がそのねこをつかまへてだいて外へ出してやりました。

四月二十九日 火曜 雨

夜うちにおきやくがあつて、十時ごろまでおきてゐました。

□ (尋 三 男)

四月二十五日 金曜 晴

ばん日記帳をこしらへた。ふかせのおばあさんが来て、大きい妹にばな

なを下さつた。それがどうもうらやましかつた。
兄さんに見まひじやうを出した。

四月二十六日 土曜 晴

がくかうからかへつて、ふろへ行つた。ばん、お父さんがいこくへ行つた人のはなしをされた。それが大そうおもしろかつた。

四月二十七日 日曜 晴

ばんめしをたべてゐると、外で妹の泣きごゑがした。とんで出てみると、向ふから大きなぶど、つぐが来たのであつた。ぶるとつぐはどうもせず、いんでしまつたが、妹はまだなか／＼泣きやまないの、うちへつれていつて、おくわしをもらつてやつたら、やう／＼きげんをなほした。

四月二十八日 月曜 晴

がくかうからかへつてみると、こひのをちさんがきていらつしやつた。あすのばんつりに行かうといつていなれた。

四月二十九日 火曜 雨
がくかうのけいこがすんでかへる時、雨がふり出したので、大手町の店のきの下に雨やどりをしてゐたら、そこへ店のげんさんが傘をもつて来てくれたのでさしてかへつた。

第十一 童謡和歌俳句についての指導

一 童謡と其の指導

所謂流行の童謡を葬る——童謡の本質——綴り方に於ける
童謡の指導

一しきり全盛を極めた童謡が最近下火になつたと云ふ人があります。これは一面から見てたしかに事實であるに違ひありません。しかもそれは果して樂觀すべきことであるか、將また悲觀すべきことであるかと言ふに、そこには二様

の意見が相対立してゐるやうであります。その二つの相反する意見について詳かに考察してみると、その内容にはまた色々の異なつた考へが交つてゐるやうに察せられます。今それ等を一々検閲してみたら、相當に面白い獲物があるかも知れませんが、それは他日に譲つて、率直に私の愚見を述べさして頂くならば、童謡が下火になつたといふ今日の状態は、むしろ慶すべきことであると思ひます。しかしながらかう言へばとて、私は決して綴り方教育上における眞の童謡の價値を否定しようと言ふのではありませぬ。否、むしろ大いに之を尊重すればこそ斯うしたことを申すのであります。これまで方々の新聞や雑誌其の他に於て鳴り物入りで騒ぎ立てた所謂流行の童謡は、其の中に多くのいかさまなものを含んで居りました。中には新聞や雑誌を賣らんがために、詩について何等の理解を有たない記者たちが徒らに兒童の歡心を買つて、猫も杓子も驅つて之に走らしめたことが少くありませんでした。これ等は何れも兒童の詩眼を害ひ、學校の教育を毒するもので、識者は一面に於て眉をひそめ、眞の童謡

に精進する人たちは一方ならぬ迷惑を感じてゐたのであります。今これ等のいかさまな童謡が漸次に影をひそめて來たことは、教育のためにも眞の童謡のためにも誠に慶すべきことであらねばならぬと思ひます。

童謡は言ふまでもなく詩であります。子供のうたであり、藝術であります。随つて、そこには先づ詩としての豊醇な内容がなければならぬ。然るにこれまでの童謡はどうでありましたか、果してみんながさうした内容を有つてゐたでありますか。私は手近にある新聞紙の童謡欄に目を通して次のやうなものを發見する時、泣きたい程の悲しみを禁じ得ないものであります。

○

私がけさ

起きて

顔を洗つてゐたら

雀が一羽あちらへ
とんでいきました。

何でも言葉を幾つかに切つて、行をかへて並べさへすれば童謡だと思つてゐる児童も哀れであります。それよりも、これを童謡として堂々と発表する新聞記者の心事を憐ますには居られませぬ。特に童謡そのものゝために悲しみに堪へない次第であります。

童謡は詩であるがゆゑに、豊醇な内容と同時に、之を生かして盛るところの言葉が必要であります。しかも其の言葉は、通常の散文とちがつて、詩の内容である作者の生命の脈々たる律動をさながらに傳へるものであらねばなりません。詩とリズム、それは離して考へることの出来ない渾一體であると思ひます。此の意味から言つても、前の童謡(?)の如きは全く其の價値を發見するに苦しむものであります。

たゞし、私の茲に言ふリズムは、必ずしも從來新體詩などで言つてゐるやう

な七五調とか五七調とか言ふ種類の、所謂型式的な調子を指してゐるのではありませぬ。否、あゝした外型的な傳統的な調子に囚はれることは、却つて詩の内容を束縛して之を害ふ憂さへ少くないのであります。しかし、童謡は詩である以上、その内の美しさをさながらに傳ふるリズムの快さが、必然的に其の内容に流れてゐて、それがまた、さながらに言葉の上に生きて傳へられねばならぬと思ひます。たとへば

はねつるべ

おらが背戸の

はねつるべ

水波むたんびに

ぎいこ ばたり

それをみつけて

小鳥三羽